古今和謌集

特別
ヘ4
8099
1

へ4
8099
1

<2001-011>

やまとうたは人の心をたねとしてよろつのことの葉とそなれりける世中にある人ことわさしけきものなれは心におもふことを見るものきく物につけていひいたせるなり花になくうくひす水にすむかはつのこゑをきけはいきとしいけるものいつれか歌をよまさりける力をもいれすしてあめつちをうこかし目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ男女のなかをもやはらけたけきものゝふの心をもなくさむるはうたなりこのうた

あめつちのひらけはしまりける時よりいてきにけり（天のうきはしの下にて女神男神となりたまへることをいへる哥なり）しかあれとも世につたはることはひさかたのあめにしてはしたてるひめにはしまり（したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとの神のかたちをかやうとのたにうつりてかゝやくをよめるえひすうたなるへし）これらはもしのかすもさたまらすうたのやうにもあらぬことゝもなりあらかねのつちにしてはすさのをのみことよりそおこりけるちはやふる神代にはうたのもしもさたまらすすなほにして事の心わきかたかりけらし人の世となりて

ありてすさのをのみことよりぞ三十文字
あまりひともじはよみける　すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみなり
このくにあり女とすみたまはむとていづもの国に宮つく
りしたまふ時にその所にやいろの雲のたつを見てよみ
給へるなり　やくもたついづもやへがき
つまごめにやへがきつくるそのやへがきを　かくて花をめで
鳥をうらやみかすみをあはれび露をかなしぶ心
ことばおほくさまざまになりにけるとをき所も
いでたつあしもとよりはじまりて年月をわ
たりたかき山もふもとのちりひぢよりなりてあま
くもたなびくまでおひのぼれるごとくにこの哥も

かくのごとくなるべし　なにはづのうたはみかどのおほむ
はじめなり　おほさゝきのみかどなにはづにてみこときこえける
ときに東宮をたがひにゆづりて
てくらゐにつきたまはで三とせになりにければ王仁といふ人のいぶか
り思ひてよみてたてまつりけるうたなり
この花はむめの花をいふなるべし　あさかやまのこと
葉はうねめのたはぶれよりよみて　かづらきのおほきみを
みちのおくへつかはしたりけるに
くにのつかさことおろそかなりとてまうけ
などしたりけれどすさまじかりければうねめなりける女の
かはらけとりてよめるなり　これにぞおほきみの
こゝろとけにける　この二うたはうたの
ちゝはゝのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける
そもそもうたのさまむつなりからのうたにもかくぞあるべき

ゆゑかく花を見はへる春のむくさ日とはよし
なるこゝろなきのみことをなる事そてよし
まゐらうた

みなとかはさくやこれさ花をこよひ
くゐはけの空とはくやこ乃をしはいつかあか
ゆゑし

物に作はかなるうた

さく花はたりしいはく身のありきかさ

あまてらすこれはしたしとてとはいふ乃なるを
これはとをおもひて物はたえゆかせぬ物なりこれはいひをな
いつゝもかんそのなえもしはゆはるよとうとはいかん
たまふはいひ
なふ事かり　み作はいはすらなるし

春は霞さかしこれ霞のおさこそていはれ

悲し我をしにきてやわかむとはなるみち
これ物をもなすへてかまにやしにえなるとやうなりはたなる
なるにかなへともみをたちはみかやるふこのま經になるふ
せくもあるいもはなえすてる
なるやこまにいかたまふなるそ

よりみえたとへうた

我恋はよむともつきし　ありそ海のはま

のまさこはよみつくすとも

これはわか恋のつきせぬ事をそのまゝ作てみせるなる
はなるそかくまにるかんなれとはし秋のたへるさとまゐやう
なるは八すうしう海をとへしはなるへしとはる乃ありよれはゆく人は

風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり　この歌などやかなふべからむ
いつゝにはたゞことうた
いつはりのなき世なりせばいかばかり人の
ことのはうれしからまし　といへるなるべし
これは事のとゝのほりたゞしきをいふなり　この歌の心さらにかなはず
とめ歌とやいふべからむ　山ざくらあくまで色をみつるかな花ちるべく
も風ふかぬ世に
むつにはいはひうた
この殿はむべもとみけりさきくさのみつ
ばよつばにとのづくりせり　といへるなるべし
これは世をほめて神につぐるなり　この歌いはひ歌とは
見えずなんある　かすがのにわかなつみつゝよろづ代をいはふ心は神ぞ
しるらん　これらやすこしかなふべからん　およそ
むくさにわかれん事はえあるまじき事になん　今の世中
色につき人の心花になりにけるより　あだなる
歌はかなきことのみいでくれば　色このみの家にむもれ
木の人しれぬこととなりて　まめなる所には花
すゝき穂にいだすべき事にもあらずなりにたり
そのはじめを思へばかゝるべくなむあらぬ　いにしへの
世々のみかど　春の花の朝　秋の月の夜
ごとにさぶらふ人々をめして　ことにつけて

ふるさとをはてまうてし後たまふなかにあきの花をとふと
てたより参ふりなといつは月越あふそて
しるへ絶すれやうにたよりなきをみてまかいてさ
くらきよりくらきみちにし実愛しるあり
のこりおもひをのこれ秋の露ふくて山はつ
聞てきゝを猶ひよ猶さき身かとも木の葉の
しいのよおもひを思しのかりふに我へて人
をさしいる霞のながり夜越しのいなかさこそ
見人の思ふに春しおしきかれにて月をとこ
山おくむかしをおもひ侍てよそみなかりし一時

をく猶つゝもふるさとをいひて我なくさめなる道芝
のなかさに花すゝきのを見秋のゆふくれな木
の葉のおちつもる年ふりて小萩ことの
露のみ秋の霜とふることはなけれ草葉の露の
のなかをみるにも我身をおもひやるきはなるほとさ
へをとりて時雨ふりしはしいつよりもいとゞさしの
つれしもうかくなりなれは秋山の滝をとけ難
中のことをくまて秋の夜にもさて萩をとふかな嘆の
さそくの夜のなかをかきいつのはくれ行すゝりの紙
しをくへていひよし難河をさして世中をいかなる人

来つるに今はふしの山も煙たゝすなりなから
のはしもつくるなりときく人は哥にのみそ
心をなくさめけるいにしへよりかくつたはる
うちにもならの御時よりそひろまりにける 文武天皇
かのおほん代や哥の心をしろしめしたりけ
むかのおほん時におほきみつのくらゐかき
のもとの人まろなむ哥のひしりなりける
君もひとも身をあはせたりといふなるへし
秋の夕へたつた河になかるゝもみちをはみ
かとのおほんめにはにしきと見たまひ春のあし

たよしの山のさくらは人まろか心には雲かとのみなむ
おほえける又山のへのあか人といふ人ありけり
哥にあやしくたへなりけり人まろはあか
人かかみにたゝむことかたくあか人は人まろかし
もにたゝむことかたくなんありける ならのみかとの御哥 たつた河紅葉みたれて
なかるめりわたらは錦中やたえなむ人まろ梅の花それとも
みえす久方のあまきる雪のなへてふれゝはほのほのとあかしの
浦のあさきりに島かくれゆく舟をしそ思ふ赤人春の野に
すみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ねにけるわかの
浦にしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる
此人々をおきて又すくれたる人もくれ竹の世々

小乗志要といへるもの悉くなくてこそ其道あ
りとおぼえ侍れたゞしさきに審未決うさをあはせてたま
かえりしふと申つるは旅ひゝ心にて無作の人
の事をもうたの心をもしらまつる人はふかき
まゐりたる連歌の道一筋これの道にの前
無念ことわたくしよき歌あるかの時もここの
手にもしてちと親あまねく代々千代あまたの
かりにも仏の道をもすて置もまうる人
よき人数々おほく浦にも法は海より深く
すぐれたるひとをばやもとれやうにされて道とも其の

かのちかき代にその名きこゆる人はすなはち
僧正遍昭はうたのさまはえたれどもまことすくな
したとへば絵にかける女をみていたづらに
心をうごかすがごとし

あさみどりいとよりかけて白露を
玉にもぬける春のやなぎか

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
嵯峨野にてむまよりおちてよめる　名にめでて
をれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな　ありはら
のなりひらはその心あまりてことばたらず
しぼめる花の色なくてにほひのこれるがごとし
月やあらぬ春やむかしの
春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
てしこれそこの作りまでもさとしたる物ものの事

をとこのなこりとかやいふや　文屋乃やすひてハ言葉
はうかうも成さしけるかれ
ハたくみにてそのさま身におはすいはゝあき人
のよききぬきたらんかことし　吹からに秋の草木のしほるれハむへ山風を
あらしといふらん　深草のみかとの御国忌の日　草ふかき
かすみのたにゝかけかくしてる日のくれしけふやハあらぬ　宇治山の
僧喜撰ハ詞かすかにしてはしめをはりた
しかならすいはゝ秋の月をみるにあかつきの雲
にあへるかことし　我庵ハ都のたつみしかそすむ世をうち山と人ハいふなり　よめる
哥おほくきこえねハかれこれをかよハしてよくし
らすなりけりこまちハいにしへのそとほりひめの
流なりあはれなるやうにてつよからすいはゝよき
女のなやめるところあるにゝたりつよからぬハ
をうなの哥なれハなるへし　思ひつゝぬれハや人のみえつらむゆめとしりせハさめさ
らましを　色みえてうつろふものハ世中の人の心の花にそ
ありける　わひぬれハ身をうき草のねをたえてさそふ水あらハいなんとそ思ふ
みんとそ思ふ(?)この歌のあるまし　大伴のくろぬしハそのさまいやし
かきてしるし(?)
しいはゝたきゝおへる山人の花のかけにやすめるかことし
あるかことし　思ひいてゝ恋しき時ハはつかりのなきて
わたると人ハしらすやかゝみ山いさたちよりてみて
みてゆかん年へぬる
身ハ老やしぬると　このほかの人〻その名きこゆる野

亀のおほかたならぬさまもろこし大臣の母
しげき末の葉のやうにおもひの進しけるとみえ
おもひてそのさかひをうけぬなり亀のをしかはいま
も亀の心きみ何とも知らずしもとろしめす事より
の時あひのうつりかはる世をみるあひのあきもかの
れいのかはりしもの御心のはしのかはりまでかの袖
はなきたには世をかくしのはけたくも山の奥に
より意志けくおほしましてよみ給ひしまゝりことを
きこしめし御心よわくなりにしとをすてたまひ
ぬるまゝの仰せし亀の事をも覚えすかしゆかりの

しるをしたりたまふをしとしもみそなはして後
の世をもはかりとられとて延喜八年四月十八日より
大内記きのとものりのそへの御書の所のあつかりさせの
ほうおうさせ給ひておもひの外のよしうけたまはりしかの
みつはらの御門の府生と申すのふみのみかどの御をさ
せられてかへりたまふにいとゝ世の中のはかなさを
うらみとも思ひてまはりしかたまふにて御覧ぜられ
かならず武蔵の所にとりはしめて御らんずるを
きてもみちをなり貫之の紀はまて文はかの
めそつけてきみをおもひいてもいとゝ秋の夜の

くさはみて言越しもあふけの山たかしいこりてめ
むすひをいのりおさめし春夏秋冬なとにつゐてきく
のうたをえらむことは勝たなしいまのすへてちらさ
はしまれる川宗て古来むもろ々の歌といふことくこ
の道しおのれあまたはまてて山をしたのゝそのちえ
海のまなこのうははつらなくつゝけ道はしともおもしろ
河のせにまかすもの見して来ら年をもとけ持はし
のいさわとさとりよるもしいの人祖とりつきまほく
花をしてさき花もあはれをしくつをしてもなし来
舎をしし秋の歌のおもむきをかこて道はかはらぬ人のみ

みおよりまかりはちみつのはらはち尊人とたかい
をそ雲さりめあくえつのはえなくしてよけ起来
此うこの世にたてしくむまれてこの事の時も
あへゆとよみ人よりといいたのかたよしあかにたまれ
とかいのことそまれし世のかたとりいはよつのいさ
またゆしそのしいぬふとも此うさ風も志
あおをとやはおも来のいはをそうし字村の為ちの
う鶴をしてまさ未れかはるあくつさうる
のおおとりしくそうまれて宿れさ通をとる
事のもとをえらせし人いもあえのみ月をよみかりしそ

冬に作りし庵をとふ春ていまは我も花ゆかめ
あも

古今和歌集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

年のうちに春はきにけりひとゝせをこぞとやいはんことしとやいはん

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

二條のきさきの春のはじめの御うた

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらず

よみ人しらず

梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

雪の木にふりかゝれるをよめる

素性法師

春たてば花とやみらん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらず

よみ人しらず

心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの哥

二條の后のとう宮のみやす所ときこえける時正月三日おまへにめしておほせ言あるあひだに日はてりながら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ給ひける

文屋やすひで

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

雪のふりけるをよめる

かすみたち木のめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

紀貫之

春のはじめによめる

藤原言直

春やとき花やおそきとききわかむ鶯だにもなかずもあるかな

春のはじめのうた

壬生忠岑

春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

源まさすみ 當純 近院右大臣男

谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる浪や春のはつ花

紀友則

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

大江千里

鶯の谷よりいづるこゑなくは春くることをたれかしらまし

在原棟梁　業平朝臣男

春たてど花もにほはぬ山里は物うかるねに鶯ぞなく

題しらず　よみ人しらず

野辺ちかく家ゐしせれば鶯のなくなる声はあさなあさなきく

かすが野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

み山には松の雪だにきえなくに都は野べの若菜つみけり

春日野の飛火の野守出でてみよ今いくかありて若菜つみてん

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらば若菜つみてん

仁和のみかどみこにおはしましける時に人に

わかなたまひける御歌

きみがため春の野に出でて若菜つむ我衣手に雪はふりつつ

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてまつる

つれる　つらゆき

かすがの野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

題しらず　在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

寛平御時きさいの宮の哥合によめる

源宗于朝臣

ときはなる松の緑も春くれば今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれとおほせられし時よみてたてま

たいしらす　つらゆき

我せこか衣はるさめふることに野へのみとりそ色まさりける

あをやきのいとよりかくる春しもそ乱れて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

浅緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

題しらす　よみ人しらす

もゝちとりさへつる春は物ことにあらたまれとも我そふりゆく

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな

かりのこゑをきゝてこしへまかりける人を思ひてよめる

凡河内躬恒

春くれはかりかへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

かへるかりをよめる

伊勢

春霞たつを見すてゝゆくかりは花なきさとにすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

折つれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝに鶯のなく

色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも

やとちかく梅の花うへしあちきなくまつ人の香にあやまたれけり

梅花たちよるはかりありしより人のとかむる香にそしみぬる

左大臣　たかね　河原院にて秋風にさそはれ

むかしの事をおもひてよめる　家隆

東三條左のおほいまうちきみ

鶯のすむによみて梅花おりてかはし人もとめけるや

題しらず　慈性法師

よそ風におもはれしそのみしむかしの花のかにそ身にしみてぬる

世の人のこゝろをおもひて人をたのまぬ

ともなり

去年の花は今年の梅花をみせし人をいふ

人の田山にててよめる

津守経光

梅花よりさき人はみな山やことに花をたつねけり

月影をむかしをおもひてこの人のいひおこせける

とてよめる　　みつね

月影よりも花もみえて梅花をみてそこはかとなく

春の夜むかしのことをおもひてよめる

春風のやとにおもひし梅花をみて孫のやとにて

はつ花に人のつてに風のかほりをさそひて

風にて鶯のすむ宿にこゝろのかよひける

かくれかの宿に人のかよひけるを

何事もおもひしこゝろに梅花をおりてよめる

つらゆき

人はいさ心もしらすふるさとは花そ昔の香ににほひける

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ河を花とみておられぬ水に袖やぬれなん

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらん

家にありける梅の花のちりけるをよめる

つらゆき

くるとあくとめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらん

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

むめかかを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす

よみ人しらす

ちりぬとも香をたにのこせ梅花こひしき時の思ひ出にせん

人の家にうへたりける桜の花さきはしめたりけるをみてよめる

つらゆき

ことしより春しりそむるさくら花ちるといふ事はならはさらなん

題しらす　よみ人しらす

山たかみ人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我みはやさん

又は、里とほみ人もすさめぬ山さくら

山さくら我見にくれは春霞峰にも尾にもたちかくしつゝ

清和母后太皇太后　文明子　昌泰三年五月廿三日崩七十二　忠仁公女

そめとのゝ后のおまへに花かめにさくらの花をさゝせたまへるをみてよめる

さきのおほきおほいまうちきみ　忠仁公

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし

なきさの院にてさくらをみてよめる　在原業平朝臣

世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす　よみ人しらす

石はしる滝なくもかな桜花たをりてもこむみぬ人のため

山のさくらをみてよめる　素性法師

見てのみや人にかたらん桜花てことにおりていへつとにせん

花さかりに京をみやりてよめる　素性法師

見わたせは柳さくらをこきませて都そ春の錦なりける

さくらの花のもとにて年のおいぬる事をなけきてよめる　紀とものり

色もかもおなしむかしにさくらめと年ふる人そあらたまりける

をれる桜をよめる

つらゆき

誰しかもとめておりつる春霞たちかくすらん山の桜を

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

寛平御時きさいの宮の歌合の哥

とものり

みよしのゝやまへにさける桜花雪かとのみそあやまたれける

やよひにうるふ月ありける年よみける

伊勢

桜花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

さくらの花のさかりにひさしくとはさりける人の

きたりける時によみける

よみ人しらす

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し

なりひらの朝臣

けふこすはあすは雪とそふりなましきえすはありとも花と見ましや

題しらす

よみ人しらす

ちりぬれはこふれとしるしなきものをけふこそ桜おらはおりてめ

折とらはをしけにもあるか桜花いさ宿かりてちるまてはみん
紀有とも
桜色に衣はふかく染てきむ花のちりなん後のかたみに
さくらの花のさけりけるをみにまうてきたりける
人によみておくりける　みつね
我宿の花見かてらにくる人はちりなん後そ恋しかるへき
亭子院歌合の時よめる　伊勢
みる人もなき山里のさくら花ほかのちりなん
後そさかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらず　　よみ人しらず

春霞たなひく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにをさくらに思ひまさまし

残なくちるそめてたき桜花ありて世中はてのうけれは

この里にたひねしぬへし桜花ちりのまかひに家路忘て

うつせみの世にもにたるか花さくらさくとみしまにかつちりにけり

僧正へんせうによみておくりける

これたかのみこ

惟喬　文徳天皇一ノ御子　母従五位上紀名虎女

さくら花ちらはちらなむちらすとてふるさと人のきてもみなくに

雲林院にてさくらの花のちりけるをみてよめる

そうく法し　承均

桜ちる花の所は春なから雪そふりつゝきえかてにする

櫻の花のちり侍りけるをみてよみける

素性法師

花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよ行てうらみむ

雲林院にてさくらの花をよみける

そうく法し

いさ桜我もちりなむひとさかりありなは人にうきめみえなむ

あひしれりける人のまうて来てかへりにける
のちによみて花にさしてつかはしける
つらゆき
ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらはちらなん
山のさくらをみてよめる
春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへき物を
心ちそこなひてわつらひける時に風にあたらし
とておろしこめてのみ侍けるあひたにをれる桜の
ちりかたになれりけるをみてよめる
藤原よるかの朝臣　典侍因香　寛平延喜
たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり
東宮の雅院（待賢門北　壬生東）にてさくらの花のみかは水にちり
てなかれけるをみてよめる
すかのゝ高世
枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあはとこそなれ
さくらの花のちりけるをよめる
つらゆき
ことならはさかすやはあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし
桜のことくとくちる物はなしと人のいひけれはよめる
さくら花とくちりぬともおもほえす人の心そ風も吹あへぬ

さくらの花のちるをよめる
きのとものり
久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん
春宮のたちはきのちんにて桜の花のちるを
よめる
藤原よしかせ 良風
春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見ん
ゆきのちるをよめる
凡河内みつね
雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん
ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

山たかみ見つゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり
つらゆき
題しらす
一本 大伴くろぬし
春雨のふるは涙か桜花ちるをゝしまぬ人しなけれは
亭子院歌合歌
つらゆき
さくら花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そたちける
ならのみかとの御うた 平城天皇 大同天子
ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらす花はさきけり
はるのうたとてよめる

よしみねのむねさた

花の色はかすみにこめて見せすともかをたにぬすめ春の山風

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

そせい法し

花の木も今はほりうへし春たてはうつろふ色に人ならひけり

題しらす

よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花のみゆらん

はるのうたとてよめる

つらゆき

みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん

うりんゐんのみこのもとに花見にきた山のほとりにまかれりける時によめる

常康親王 仁明第二

そせい

いさけふは春の山へにましりなんくれなはなけの花のかけかは

春のうたとてよめる

いつまてか野へに心のあくかれん花しちらすは千世もへぬへし

題しらす

よみ人しらす

春ことに花のさかりはありなめとあひみん事は命なりけり

花のことよのつねならはすくしてしむかしは又もかへりきなまし

吹風にあつらへつくる物ならはこのひともとはよきよといはまし

待人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてけるかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかせ

さく花はちくさなからにあたなれとたれかは春をうらみはてたる

春霞色のちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

在原元方

霞たつ春の山へはとをけれと吹くる風は花の香そする

うつろへる花をみてよめる

みつね

花みれは心さへにそ移りける色にはいてし人もこそしれ

題しらす

よみ人しらす

鶯のなくのへことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風をなきてうらめよ鶯は我やは花に手たにふれたる

典侍洽子朝臣　寛平延喜典侍　越前別当

ちる花のなくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に哥合せんとてしける時によめる

藤原のちかけ　花人たかね　中納言有穂子

花のちる事やわひしき春霞たつたの山のうくひすのこゑ

うくひすのなくをよめる

素性法し

こつたへはをのか羽風にちる花を誰におほせてこゝらなくらむ

うくひすの花乃木にてなくをよめる

みつね

志るしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす

よみ人しらす

駒なめていさみにゆかん故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみむ世中にわか身もともにあらむものかは

小野小町

花乃色ハうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせしまに

仁和乃中将のみやすむ所の家に哥合せむとしける時によめる

そせい

おしと思ふ心ハいとによられなむちる花ことにぬきてとゝめむ

志賀の山こえに女のおほくあへりけるに

よみてつかはしける　つらゆき

梓弓春の山辺をこえくれは道もさりあへす花そちりける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

春の野にわかなつまむとこしものをちりかふ花に道ハまとひぬ

山寺にまうてたりけるによめる

やとりして春の山へにねたる夜ハ夢の内にも花そ散ける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

吹風と谷の水としなかりせはみ山かくれの花をみましや

志かより帰りけるをうなとも花山にいりて藤の花のもとに立よりてかへりけるによみておくりける

僧正へんせう

よそにみて帰らん人に藤の花はひまつはれよ枝ハ折とも

家に藤の花のさけりけるを人の立とまりてみけるをよめる　凡河躬恒

我宿にさける藤浪立かへりすきかてにのみ人のみるらむ

題しらす　よみ人しらす

今もかもさきにほふらん橘のこしまのさきの山吹の花

春雨ににほへる色もあかなくにかさへなつかし山ふきの花

山吹はあやなゝさきそ花みんとうへけん君かこよひこなくに

よしの河のほとりに山吹のさけりけるをよめる

つらゆき

吉野河岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり

題しらす　よみ人しらす

かはつなく井ての山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを

この哥はある人のいはく橘清友か哥也

贈太政大臣
浅淑右文

春のうたとてよめる

そせい

思ふとち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしか

春のとくすくるをよめる

みつね

梓弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひにうくひすのこゑのひさしうきこえさりけるをよめる

つらゆき

なきとむる花しなけれは鶯もはてはものうくなりぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに山河より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

はるをおしみてよめる

もとかた

おしめともとゝまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へは

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

おきかせ

聲たえすなけや鶯一年にふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女
ともをみてよめる

躬恒

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日雨のふりけるにふちの
花を折りて人につかはしける

業平朝臣

ぬれつゝそしひておりつる年の内に春はいくかもあらしと思へは

亭子院の哥合に春のはてのうた

みつね

けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらず　　よみ人しらず

我宿の池の藤浪さきにけり山郭公いつかきなかん

この哥ある人のいはく柿本人麿か也

う月にさけるさくらを見てよめる　　紀としさだ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん

題しらず　　よみ人しらず

五月まつ山郭公うちはぶき今もなかなん去年のふるこゑ

伊勢

五月こばなくもふりなん郭公まだしきほどの声をきかばや

題しらず　　よみ人しらず

さ月まつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

いつのまにさ月きぬらんあしひきの山郭公今ぞなくなる

今朝きなきいまだ旅なる郭公花橘に宿はからなん

音羽山をこえける時に郭公のなくをききてよめる　　紀友則

音羽山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞなくなる

郭公のはじめてなきけるをききて

そせい

郭公はつこゑきけはあちきなくぬしさたまらぬ恋せらるはた

ならのいそのかみてらにて郭公のなくをよめる

磯神ふるき宮この郭公声はかりこそむかしなりけれ

題しらす　よみ人しらす

夏山になく郭公心あらは物思ふ我に声なきかせそ

郭公なく声きけは別にしふるさとさへそ恋しかりける

郭公なかなく里のあまたあれはなほうとまれぬ思ふものから

思ひいつるときはの山の郭公からくれなゐのふりいてゝそなく

声はして涙はみえぬ郭公我衣手のひつをからなむ

葦引の山郭公おりはへてたれかまさるとねをのみそなく

今さらに山へかへるな郭公声のかきりは我宿になけ

やよやまて山郭公ことつてむ我世中にすみわひぬとよ

みくにのまち

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

紀とものり

五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかく鳴ていつち行らむ

夜やくらき道やまとへる郭公我宿をしもすきかてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくになと郭公声たえぬらむ

つらゆき

夏の夜のふすかとすれは郭公なく一こゑにあくるしのゝめ

みふのたゝみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山郭公

紀秋岑

夏山に恋しき人やいりにけむこゑふりたてゝなく郭公

題しらす　よみ人しらす

こその夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ

つらゆき

五月雨のそらもとゝろに郭公なにをうしとかよたゝなくらむ

みつね

郭公こゑもきこえす山ひこはほかになくねをこたへやはせぬ

つらゆき

郭公人まつ山になくなれは我うちつけにこひまさりけり

はやくすみける所にて郭公のなきけるをきゝてよめる

たゝみね

むしやしなも惣しまく熟ひ魚のまかしもおもふ乗
かなしさは浪の音まて秋のさそてよるの
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　つ巳

　　　　　　　　みつ広

月出るさは秋とはかなし世中ちる世中のかなさ涙かん
はらをのつ程をこてよめは

　　　　　　　　信正南乙殿し

ちらす葉の宿りにしまなむかてかやの霧をまとひ
月のおもりものの秋晩さにしよるの
　　　　　　　　　　　　　　　　　　めさむ

　　　　　　　　帯のや伊

夜秋はきよぬすかる声をあかのとせるの涙によ月
　　　　　　　　　　　　　　　　　　風乞巳

こよりとものこころすりの花をこいよとことなき
星もなれは秋しみてこれにとよみてつりつ宿

　　　　　　　　勇伴孫

ちりをさらす世り我を思ふ秋の名をいれ秋のここ夜
みる月の涙にこもりの日よるの
　　　　　　　　　　　　　　　　　　のむ

篝と蛸此纟ふ元よおもひちか霧へとをし来
　　　　　　　　風や婦く鈴ん

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　　藤原敏行朝臣

秋来ぬとめにはさやかに見えねども風のをとにぞおどろかれぬる

秋立日うへのをのこどもかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる　　つらゆき

河風のすゞしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋はたつらん

題しらず　　よみ人しらず

わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のはつ風

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹

秋風の吹にし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし

久堅のあまの河原のわたしもり君わたりなばかぢかくしてよ

天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ

こひこひてあふ夜はこよひ天河きり立わたりあけずもあらなん

寛平御時なぬかの夜うへにさぶらふをのこども哥たてまつれとおほせられける時に人にかはりてよめる

とものり

天河あさせしら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

おなし御時きさいの宮の哥合によめる

藤原興風

契けむ心そつらきたなはたの年にひとたひあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる

凡河内みつね

年ことにあふとはすれとたなはたのぬるよのかすそすくなかりける

織女にかしつる糸のうちはへて年のをなかくこひやわたらん

題しらす

素性法師

こよひこむ人にはあはしたなはたのひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかの日の夜のあかつきによめる

源宗于朝臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖そひちぬる

やうかの日よめる

みふのたゝみね

けふよりは今こむ年のきのふをそいつしかとのみまちわたるへき

題しらす

よみ人しらす

木のまよりもりくる月のかけ見れは心つくしの秋はきにけり

おほかたの秋くるからにわか身こそかなしき物と思ひしりぬれ

我ためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけはまつそかなしき

物ことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

独ぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

これさだのみこの家の哥合のうた　是貞仁和帝子 元右中将母同寛平

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事の限成ける

かむなりのつぼに人〳〵あつまりて秋の夜おしむ哥よみけるついでによめる

みつね

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき

題しらず

よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたるみゆ

是貞のみこの家の哥合によめる

大江千里

月見ればちゞに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

忠みね

久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん

月をよめる

在原元方

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人の許にまかれりける夜きり〴〵すのなきけるをきゝてよめる

藤原忠房

きりきりすいたくななきそ秋の夜のなかき思ひは我そまされる

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆき朝臣

秋の夜のあくるもしらすなく虫は我ことものやかなしかるらん

題しらす

よみ人しらす

あきはきもいろつきぬれはきりきりす我ねぬことや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらことに虫のわふれは

君しのふ草にやつるるふるさとは松虫のねそかなしかりける

秋の野に道もまとひぬ松虫のこゑする方にやとやからまし

秋の野に人松虫のこゑすなり我かとゆきていさとふらはむ

紅葉のちりてつもれる我宿に誰を松虫ここらなくらん

日くらしのなきつるなへに日はくれぬとおもふは山のかけにそ有ける

ひくらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる

在原元方

待人にあらぬ物から初雁のけさなくこゑのめつらしきかな

是貞のみこの家の歌合のうた

とものり

秋風に初雁かねそきこゆなるたかたまつさをかけてきつらん

題しらす

よみ人しらす

我門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹風に雁は来にけり

いとはやもなきぬる雁か白露のいろとる木々も紅葉あへなくに

春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかねなくなへに萩の下葉もうつろひにけり

この歌はある人のいはく柿本人まろか哥也と

寛平御時きさいの宮の歌合の哥

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあけてくる舟はあまのとわたる雁にそ有ける

雁のなきけるをきゝてよめる

躬恒

うき事を思ひつらねて雁かねのなきこそわたれ秋のよな〳〵

これさたのみこの家の歌合のうた

たゝみね

山里は秋こそことにわひしけれしかのなく音に目をさましつゝ

よみ人しらす

おく山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時そ秋はかなしき

題しらす

秋萩にうらひれをれは足引の山したとよみ鹿のなくらん

秋萩をしからみふせてなく鹿のめには見えすてをとのさやけさ

これさたのみこの家の歌合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のおのへの鹿は今やなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にあひて物かたりしけるついてによめる

みつね

秋萩のふる枝にさける花みれは本の心はわすれさりけり

題しらす　よみ人しらす

あき萩の下葉色つく今よりやひとりある人のいねかてにする

鳴わたる雁の涙やおちつらん物思ふ宿の萩のうへの露

萩の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ

ある人のいはく此哥はならのみかとの御哥なりと

おりてみはおちそしぬへき秋萩の枝もたはゝにおける白露

萩か花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる　文屋あさやす

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすち

題しらす　僧正遍昭

名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かならへまかりける時に男山にて女郎花をみてよめる

をみなへしうしとみつゝそゆきすくるをとこ山にしたてりと思へは

ふるのいまみち

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

題しらす

をのゝよしき

をみなへしおほかる野へにやとりせはあやなくあたの名をやたちなん

朱雀院の女郎花合によみてたてまつりける

左のおほいまうちきみ

女郎花秋の野風にうちなひき心ひとつを誰によすらん

藤原定方朝臣

秋ならてあふ事かたき女郎花あまの河原におひぬものゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色にいてゝまたきうつろふ

みつね

つまこふる鹿そなくなる女郎花をのかすむのゝ花としらすや

女郎花吹すきてくる秋風はめにはみえねとかこそしるけれ

たゝみね

人のみることやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらん

ひとりのみなかむるよりは女郎花わかすむやとにうへてみましを

物へまかりける人の家にをみなへしうへたりけるを
みてよめる

兼覧王

をみなへしうしろめたくもみゆるかなあれたるやどにひとりたてれば

寛平御時蔵人所のをのこどもさがのに花みんとてまかりたりける時かへるとてみなうたよみけるついでによめる

平さだふん

花にあかでなにかへるらんをみなへしおほかる野べにねなましものを

これさだのみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとに野べをにほはす

ふぢばかまをよみて人につかはしける　つらゆき

やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたきかににほひつゝ

ふぢばかまをよめる　そせい

ぬしゝらぬかこそにほへれ秋のゝにたがぬぎかけしふぢばかまぞも

題しらず

平定文

今よりはうへてだにみじ花すゝきほにいづる秋はわびしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

在原棟梁

秋の野の草のたもとか花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらん

素性法師

我のみやあはれと思はむきりきりすなく夕かけのやまとなてしこ

題しらす　　よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春はみし秋はいろいろの花にそありける

もゝくさの花のひもとく秋の野に思ひたはれん人なとかめそ

月草に衣はすらん朝露にぬれてのゝちはうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時ふるのたき御らんせんとておはしましけるみちに遍昭かはゝの家にやとりたまへりける時に庭を秋の野につくりておほん物語のついてによみてたてまつりける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも秋のゝらなる

古今和歌集巻第五

秋哥下

是貞のみこの家の哥合のうた　　文屋やすひで

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

草も木も色かはれともわたつ海の浪の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる　　紀よしもち　淑望

紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん

題しらす　　よみ人しらす

霧立て雁そなくなる片岡の朝の原は紅葉しぬらん

神な月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの杜

ちはやふる神なひ山の紅葉にはおもひはかけしうつろふ物を

貞観御時綾綺殿のまへに梅の木ありけり西の方にさせりける枝の紅葉はしめたりけるを上にさふらふをのこともよみけるついてによめる　　藤原かちおむ

おなし枝をわきて木のはのうつろふは西こそ秋のはしめなりけれ

いし山にまうてける時おとは山の紅葉を見てよめる　　つらゆき

秋風の吹にし日よりをとは山峯の梢も色つきにけり

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゝにそむらん

壬生忠岑

秋の夜の露をは露とをきなから雁の涙や野へをそむらん

題しらす

よみ人しらす

秋の露色〻ことにをけはこそ山の木の葉のちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色つきにけり

秋の哥とてよめる

在原元方

雨ふれと露ももらしをかさとりの山はいかてか紅葉そめけん

神の社のあたりをまかりける時にいかきのうちの紅葉をみてよめる

つらゆき

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり

これさたのみこの家の哥合によめる

たゝみね

雨ふれはかさとり山の紅葉ゝ行かふ人の袖さへそてる

寛平御時きさいの宮の歌合によめる

よみ人しらす

ちらねともかねてそおしき紅葉ゝは今はかきりの色とみつれは

やまとのくにゝまかりける時さほ山にきりのたてりけるを

見てよめる

きのとものり

たかための錦なれはか秋霧のさほの山へを立かくすらん

是貞のみこの家の哥合のうた

よみひとしらす

秋霧は今朝はなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん

秋のうたとてよめる

坂上これのり

さほ山のはゝその色はうすけれと秋はふかくもなりにける哉

人の前栽に菊にむすひつけてうへけるうた

在原なりひらの朝臣

植しうへは秋なき時やさかさらん花こそちらめ根さへかれめや

寛平御時きくの花をよませ給ける

とし行の朝臣

久かたの雲の上にてみる菊はあまつほしとそあやまたれける

この歌ハまた殿上ゆるされさりける時にめし

あけられてつかうまつれるとなむ

これさたのみこの家の歌合のうた

きのとものり

露なからおりてかさゝむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

大江千里

うへし時花まちとをにありし菊うつろふ秋にあはむとやみし

おなし御時せられける菊合にすはまをつくりて菊

の花うへたりけるにくはへたりける哥吹あけの

浜のかたに菊うへたりけるによめる

すかはらの朝臣　延喜元年以後贈位以前也

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山ちの菊の露のまにいつか千とせを我はへにけん

菊の花のもとにて人の人まてるかたをよめる

とものり

花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみそあやまたれける

大さはの池のかたにきくうへたるをよめる

一本と思し花をおほさはの池の底にも誰かうへゝん　友則

世中のはかなき事を思ひける折に菊の花をみ
てよめる　貫之

秋の菊にほふ限はかさしてむ花よりさきとしらぬ我身を

しら菊の花をよめる

凡河内みつね

心あてにおらはやおらん初霜のおきまとはせる白菊の花

これさたのみこの家の哥合によめる

よみ人しらす

色かはる秋の菊をは一年に二たひにほふ花とこそみれ

仁和寺に菊の花めしける時に哥そへてたてまつれとおほせられけれはよみてたてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊の花をうつしうへけるをよめる

つらゆき

さきそめしやとしかはれは菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらす　よみ人しらす

さほ山のははそのもみち葉ちりぬへみよるさへみよとてらす月影

宮仕へひさしうつかうまつらて山さとにこも

侍りけるによめる

藤原関雄　治部輔五位

奥山のいはかき紅葉ちりぬへし　てる日のひかりみる時なくて

題しらす　よみ人しらす

竜田河紅葉みたれてなかるめり　わたらは錦中やたえなん

この哥はある人ならのみかとの御哥なりとなむ申

たつた河もみちはなかる神なひの　みむろの山に時雨ふるらし

又はあすかゝはもみちはなかる　此哥不注人丸哥他本同

恋しくはみても忍はむもみちはを　吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへすちりぬるもみちはの　ゆくへさためぬ我そかなしき

秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ　道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはむもみちはの　ふりかくしてし道とみなから

秋の月山辺さやかにてらせるは　おつる紅葉のかすをみよとか

吹風の色のちくさにみえつるは　秋の木のはのちれはなりけり

関雄

霜のたて露のぬきこそよわからし　山の錦のおれはかつちる

うりむゐむの木のかけにたゝすみてよみける

僧正遍昭

わひ人のわきてたちよる木のもとは　たのむかけなくもみちちりけり

二条の后の春宮のみやす所と申ける時に御

屏風に竜田河にもみちなかれたるかたを
かきけるを題にてよめる
そせい
紅葉のなかれてとまる湊には紅ふかき浪やたつらん
なりひらの朝臣
ちはやふる神代もきかす竜田河から紅に水くゝるとは
これさたのみこの家の哥合のうた
としゆき朝臣
わか来つるかたもしられすくらふ山木々のこのはのちるとまかふに
たゝみね
神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ
北山に紅葉おらむとてまかれりける時によめる
つらゆき
みる人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり
秋のうた
かねみの王
竜田姫たむくる神のあれはこそ秋のこのはのぬさとちるらめ
をのといふ所にすみ侍ける時紅葉を見てよめる
つらゆき
秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむ我さへそたひ心ちする
神なひの山をすきて竜田河をわたりける時に

もみちのなかれけるをみてよめる

きよはらのふかやふ

神なひの山をすきゆく秋なれは立田河にそぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちはらのおき風

白浪に秋のこのはのうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

たつた河のほとりにてよめる

坂上これのり

紅葉のなかれさりせは龍田河水の秋をはたれかしらまし

志賀の山こえにてよめる

はるみちのつらき

山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる

みつね

風ふけはおつる紅葉は水清みちらぬかけさへ底にみえつゝ

亭子院の御屏風の絵に河わたらんとする
人のもみちのちる木のもとに馬をひかへて
たてるをよませ給けれはつかうまつりける

立とまりみてをわたらん紅葉は雨とふるとも水はまさらし

これさたのみこの家の歌合のうた

三くみ孫

山田の秋のかりいほにおく露は也まかせの波かな

新古今　　よ人人しらす

かゝる也まの山田をもりてそ稲葉のそよきに露のおきまよふ

かま田の田にあまたのひつちはなにそかやの秋かな

小山田の信正居昭とまけるの水の海のわかの音

よみ哉　　かせは清し

みちのくの袖にこほれてそ菊の秋の浪とたむ人の

寛平の時のかへてなまことふれ人の

無ても涙にみちかゝにぬかれる

おなし色をとまりの哉

名寄　　勝

み山ちのもみちの色の秋をそて秋の浪と思ひしるかな

秋のよの色をなかてゝ涙に心あられてよめる

清く摂津

年ごとに紅葉をかさて立田河みなかみや秋のとまりなるらん

なかの月の清こそかれ日の本まてよめる

摂津清くよそとくるの山よかく廉れ色のうらや秋はくる　読人

おなし清こまりの日よめる

みつ孫

道しらはたつねもゆかむもみち葉を
ぬさとたむけて秋はいにけり

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　よみ人しらす

龍田河錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

題しらす　よみ人しらす

おほそらの月のひかりし清けれは影見し水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのゝ吉野の山にみ雪ふるらし

今よりハつきてふらなん我宿のすゝきおしなみふれる白雪

ふる雪ハかつそきゆらしあし引の山のたきつせをとまさるなり

この河にもみち葉なかる奥山の雪けの水そいままさるらし

故郷ハ吉野の山しちかけれハひと日もみ雪ふらぬ日ハなし

我宿ハ雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれハ

冬歌とてよめる

紀貫之

雪ふれハ冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

志かの山こえにてよめる

紀あきみね

白雪の所もわかすふりしけハいはほにもさく花とこそみれ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にてよめる

坂上これのり

みよしのゝ山の白雪つもるらし故郷さむく成まさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふちハらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪ハしら浪の末の松山こすかとそみる

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみわけて入にし人のをとつれもせぬ

白雪のふりてつもれる山里ハすむ人さへや思ひきゆらん

雪乃ふれるを見てよめる

凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

雪の木にふりかゝれるをよめる

つらゆき

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるをみてよめる

坂上これのり

あさぼらけ有明の月とみるまでによしのゝ里にふれる白雪

題しらず

よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

梅花それともみえず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば

この哥ある人のいはく柿本人まろか哥なり

むめの花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

雪のうちのむめの花をよめる

きのつらゆき

梅の香のふりをける雪にうつりせはたれかことゝゝわきておらまし

雪の木にふりかゝれるをよめる　紀友則

雪ふれは木ことに花そさきにける いつれを梅とわきてをらまし

物へまかりける人を待てしはすのつこもりによめる

みつね

我またぬ年はきぬれと冬草の かれにし人はおとつれもせす

年のはてによめる　在原元方

あらたまの年のをはりになることに 雪も我身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそ つゐにもみちぬ松もみえけれ

年のはてによめる　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすかゝは なかれてはやき月日なりけり

哥奉れとおほせられし時に よみて奉れる

つらゆき

行年のおしくもあるかなますかゝみ 見るかけさへにくれぬと思へは

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらす　　よみ人しらす

わか君は千世にや千世にさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまて

わたつ海のはまのまさこをかそへつゝ君かちとせのありかすにせん

しほの山さしてのいそにすむ千鳥君かみよをはやちよとそなく

わかよはひ君かやちよにとりそへてとゝめおきては思ひいてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもなからへて君かやちよにあふよしもかな

仁和のみかとみこにおましましける時に御をはの八十の賀にしろかねを杖につくれりけるを見てかの御をはにかはりてよみける

僧正へんせう

ちはやふる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬへらなり

堀河のおほいまうちきみ（昭宣公）の四十の賀（貞観十四年右大臣左大将十七年四十）九条の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まかふかに

さたとき（貞辰）のみこ（清和第七）のをはのよそちの賀を大井にてしける日よめる

きのこれをか（家本或説惟熙 イリニキ）

亀の尾の山のいはねをとめておつる瀧のしらたま千世のかすかも

さたやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に桜の花のちるしたに人の花みたるかたかけるをよめる（貞保 一本或作恒 清和第二子 南宮 母二条后 延長二年薨）

藤原おきかせ

いたつらにすくす月日はおもほえて花みてくらす春そすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける（本康 一本或作本 延喜元年薨 号八条宮 仁明四子 母従四上 紀種子）

きのつらゆき

春くれはやとにまつさく梅花きみかちとせのかさしとそみる

そせいほうし

いにしへにありきあらすはしらねとも千とせのためしきみにはしめん

ふしておもひおきてかそふるよろつ代は神そしるらんわか君のため

藤原三善か六十賀によみける

在原しけはる

鶴亀も千とせの後はしらなくにあかぬ心にまかせはててん

この歌はある人在原のときはるかともいふ

よしみねのつねなりかよそちの賀にむすめにかはりてよみ侍ける

そせいほうし

よろつ世を松にそ君をいはひつる千とせのかけにすまんと思へは

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時（尚侍満子 内大臣高藤二女 延喜十七年従二位 年養延喜帝／定国大納言 右大将 延喜八年七月薨四十）

に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりける

春哥

かすかのにわかなつみつゝよろつ代をいはふ心は神そしるらん

山たかみ雲井にみゆる桜花心のゆきておらぬ日そなき

夏

めつらしき声ならなくに郭公こゝらの年をあかすも有かな

秋

住の江の松を秋風吹からに声うちそふるおきつしらなみ

千鳥なくさほの河霧立ぬらし山のこのはも色まさり行

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみちを風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山下風に花そちりける

春宮のむまれ給へる時にまいりてよめる（文彦太子 保明親王 延喜三年誕生 四年二月十日立太子 年廿一薨）

典侍藤原よるかの朝臣

峯高き春日の山にいつる日はくもる時なくてらすへら也

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらず　　　在原行平朝臣

立別いなばの山の峯におふる松としきかば今かへりこむ

よみ人しらず

すがるなく秋の萩原あさたちて旅ゆく人をいつとかまたむ

限なき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

をののちふるがみちのくのすけにまかりける時に

ははのよめる

たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなとどめそ

さだときのみこの家にて藤原きよふがあふみのすけにまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる

きのとしさだ

けふ別あすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞たちわかれなばこひしかるべし

人のむまのはなむけにてよめる

貫之

をしむから恋しき物を白雲のたちなむのちはなに心地せむ

ともだちの人のくにへまかりけるによめる

別ては程をへたつと思へはやかつみなからにかねて恋しき

在原滋春

あつまの方へまかりける人によみてつかはしける

伊香子あつゆき

思へとも身をしわけねは目にみえぬ心を君にたくへてそやる

相坂にて人をわかれける時によめる

難波万雄

相坂の関しまさしき物ならはあかすわかるゝ君をとゝめよ

題しらす

よみ人しらす

唐衣たつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへきものを

このうたはある人のつかさをたまはりてあたらしきめにつきて年へてすみける人をすてゝたゝあすなんたつとはかりいへりける時にともかうもいはてよみてつかはしけるとなん

ひたちへまかりける時に藤原のきみとしによみてつかはしける

寵　或本　[illegible]

あさなけにみへき君としたのまねは思たちぬる草枕也

きのむねさたかあつまへまかりける時に人の家にやとりて暁いてたつとてまかり申しけれは

女のよみていたせりける
よみ人しらす
えそしらぬ今心みよ命あらは我やわするゝ人やとはぬと
あひしりて侍りける人のあつまへまかりけるをおくるとてよめる
ふかやふ
雲井にもかよふ心のおくれねはわかると人にみゆはかりなり
とものあつまへまかりける時によめる
よしみねのひてをか
しら雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくたくたひかな

みちのくへまかりける人によみてつかはしける
つらゆき
しら雲のやへにかさなるをちにてもおもはん人に心へたつな
人をわかれける時によめる　つらゆき
わかれてふ事は色にもあらなくに心にしみてわひしかるらん
あひしれりける人のこしのくにゝまかりて年へて京にまうてきて又かへりける時によめる
凡河内躬恒
かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそ有けれ
こしのくにへまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらむ白山の雪みるへくもあらぬ我身は

をとはの山のほとりにて人をわかるとてよめる

つらゆき

をとは山こたかくなきて郭公君か別をおしむへらなり

藤原のちかゝけからもの〻つかひになか月のつこもりかたに

まかりけるにうへのをのこともさけたうひける

ついてによめる

藤原兼茂　延長元年卒

もろともになきてとゝめよ蛬秋のわかれはおしくやはあらぬ

平もとのり　元外記元大外記

秋霧のともにたちいてゝ別なははれぬ思ひに恋やわたらん

源のさねかつくしへゆあみむとてまかりける時に

山さきにてわかれおしみける所にてよめる

しろめ

命たに心にかなふ物ならはなにか別のかなしからまし

山さきより神なひのもりまておくりに人〳〵

まかりてかへりかてにして別おしみけるに

よめる

源さね　右近中将實

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん

いまはこれよりかへりねとさねかいひけるおりによめる

菅原か孫なり

志とされてさゆし心の事なし書道ハ梅花の道もあらそひ

菅原これをとゝむけしのすけに梅の家の時に

なくりかあふさゝをさ梅とてよみけり

清ら中夫

かれ出てそかし梅人の梅ふさゝハ人たのみの花よそ絶

おりくのちゑかの梅かの夢のむさし野なるらむ

まことよみ侍

菅原か孫すけの胡屋

春の梅なし花しら山ちる梅とも宮戸まくら波八百

人の花山よ梅してそ梅ふさら清くるへの海かう

おむしき夢の時よりよみ侍

信正入道

久遠の籬ハ山とみそおんかいけ花しと庵とりハ立く

山よりの月りてかたり梅りてきそ人くくさ道

るらいてりよみ侍

逸仙法し

まつれしとハ山の清くらか梅色て人ところよ梅ハ花の月なく

うちむかふのみこれ舎利会よ山よの月りて庵

をへるり清くらの花れりしふてよみ

信正つくんせり

山風に桜ふきまきみだれなむ花のまぎれにたちとまるべく

幽仙法し

ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかどみこにおはしましける時ふるの
滝御覧じにおはしましてかへり給けるに
よめる

兼芸法師

あかずしてわかるゝ涙滝にそふ水まさるとやしもは見ゆらん

かむなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべて
雨のいたくふりければゆふさりまで侍りて
まかり出ける折にさか月をとりて

つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましておしとこそ思へ

とよめりける返し

兼覧王

惜むらむ人の心をしらぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

かねみのおほきみにはじめて物かたりして別
るゝ時によめる

みつね

わかるれどうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきになにをこひまし

題しらず

よみ人しらず

あかずしてわかるゝ袖のしら玉を君がかたみとつゝみてぞ行

限なくおもふ涙にそほちぬる袖ハかわかし逢む日まてに

かきくらしことハふらなむ春雨にぬれきぬきせて君をとゝめむ

志ひてゆく人をとゝめむ桜花いつれを道とまよふまてちれ

志賀の山こえにていしゐのもとにて物いひ
ける人のわかれける折によめる

貫之

むすふ手の志つくにゝこる山の井のあかても人に別ぬる哉

みちにあへりける人のくるまに物をいひつきて
わかれける所にてよめる

とものり

志たの帯の道ハかた〳〵わかるとも行めくりてもあはむとそ思ふ

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけ見れはかすかなるみかさの山にいてし月かも

この哥はむかしなかまろをもろこしに物ならはしにつかはしたりけるにあまたのとしをへてえかへりまうてこさりけるをこの国より又つかひまかりいたりけるにたくひてまうて来なむとていてたちけるにめいしうといふ所のうみへにてかのくにの人むまのはなむけしけりよるになりて月のいとおもしろくさしいてたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝなかされける時に舟にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟

題しらす　よみ人しらす

都いてゝけふみかの原いつみ河かは風さむし衣かせやま

ほのほのとあかしの浦の朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

この歌はある人のいはく柿本人麿か歌也

あつまの方へ友とする人ひとりふたりいさなひて行けりみかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるにその河のほとりにかきつはたいとおもしろくさけりけるを見て木のかけにおりゐてかきつはたといふいつもしを句のかしらにすゑてたひの心をよまんとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあれははる〳〵きぬる旅をしそ思

むさしの国としもつふさの国との中にあるすみた河のほとりにいたりて都のいと恋しうおほえけれはしはし河のほとりにおりゐて思ひやれはかきりなくとをくもきにけるかなと思ひわひてなかめをるにわたしもりはや舟にのれ日くれぬといひけれは舟にのりてわたらんとするにみな人ものわひしくて京に思ふ人なくしもあらすさるおりにしろきとりのはしとあしとあかき河のほとりにあそひけり京にはみえぬとりなれはみな人見しらすわたしもりにこれはなにとりそととひけれはこれなん宮ことりといひけるを

といひけるをききてよめる

名にしおはゞいさ事とはむ都鳥わか思ふ人はありやなしやと

題しらず　　よみ人しらず

北へ行雁ぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる

この哥はある人をとこ女もろともに人のくにへまかりけり男まかりいたりてすなはちみまかりにければ女ひとり京へかへるみちにかへるかりのなきけるをききてよめるとなんいふ

あづまの方より京へまうでくとてみちにてよめる

おと　　壬生よしみねの女

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらん

こしの国へまかりける時しら山を見てよめる

みつね

きえはつる時しなければこしぢなる白山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時みちにてよめる

つらゆき

いとによる物ならなくにわかれぢの心ぼそくもおもほゆるかな

甲斐の国へまかりける時みちにてよめる

みつね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

たちまのくにのゆへまかりける時にふたみの浦
といふ所にとまりてゆふさりのかれいひたうへ
けるにともにありける人〳〵のうたよみけるつい
てによめる　　ふちはらのかねすけ
夕つく夜おほつかなきを玉くしけふたみの浦はあけてこそみめ
これたかのみこのともにかりにまかりける時に
あまのかはといふ所の河のほとりにおりゐて
さけなとのみけるついてにみこのいひけらくかり
してあまのかはらにいたるといふ心をよみてさか
つきはさせといひけれはよめる
在原業平朝臣
かりくらしたなはたつめに宿からむあまのかはらに我は来にけり
みこ此うたをかへす〳〵よみつゝかへしえせすなりにけれは
ともに侍りてよめる
紀のありつね
一年にひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思
朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ
山にてよみける
すかはらの朝臣
このたひはぬさもとりあへす手向山紅葉の錦神のまにまに
素性法師

手むけにハつゝりの袖もきるへきに紅葉に
あける神やかへさん

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみとりのなくらん

ほとゝきす

くへき程時すきぬれや待わひてなくなる声の人をとよむる

うつせみ　在原しけはる

浪のうつせ見れハ玉そみたれけるひろハゝ袖にはかなからむや

返し　壬生忠岑

袂よりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせ見むかし

う紀
よみ人しらず
あさりめに荒たる人もみぬは悲しつる果毫ハ合て
かかえ乃らる　法の中れ
かれは菊とも浪のかけまたさえて風吹ともかわつきむせ
すかりし花
いかなくの春し寒きれた常もいれとおりめて思成るかり
別るとても見きれ
ゆかりや草
折るもの八千とて悲きれ我よの法の事をかなて思へハ
芋しのきれ　ためて志らうけ

おもひ出ぬる山のもりとなされ跡念の庭ともいへとなかれせよき見れ
たかく海の木　ともおのれを
みよしのの吉野の瀧よ浮出かおとまとるも見ゆとみえん
やまかの花の木　よみ人しらず
秋は来ぬともゆかりさめきなかくいとよおもてなくおもむ風のをとむきしよ
おもひかけら
かく許りけふ日のまれなるかの人といつる何しと思ふてさの果
今は世へ後すりおもひのたりけりくいは我つきの来りのやよをおさとらん
まとうか　信正つんさう
ちの世道ハ後ハおもくふふかうむを思ふらすとも来るてふれ

さうひ　　　けふ中務

我ハ今さうしいゆるみるの花ならておもふ事をいはしぬへき
たえこゑへし

かくもの里

白露をたまにぬくとやけふの花のむらさきにさきけるをみつゝ
あさつ枝をうきうけちつきみむとしるそ山をみるへし　　恵慶
朱雀院のをみなへしあはせの時によみてたてまつりける　　忠岑
ふいに流りしを白のかし夜よをときてよめり

けふ枝秀

たてる山辺の月のはなくもりの露の秋をとめつへき
きりのうつの花それ

よきみの里

蜻蛉うつろふ花のみる白露のをけるを紫のもとに咲く
花を母

よみ人しらす

姫りきて　いかにの里にもみるへしといふをとめらにとりかへて
つまうたひはやのきれ　　よきの

かくもの里

我宿のものとをもてふりくえればきかなくかなしむやまもぞ秋の紀
おはれ

よみ人しらす

ありとみてふかにそのかをしる蝉の世をいかりとや思ふらん
宿にこし

やまとの君實　　矢田部

うちつけにこしとや花の色をみむおく白露の染るはかりを

二條の后春宮のみやす所と申ける時

めとにけつり花させりけるをよませ給ける

文屋やすひて

花の木にしあらねともさきにけりふりにしこのみなる時もかな

志のふくさ　きのとしさた

山たかみつねに嵐の吹さとはにほひもあへす花そちりける

やまし　平あつゆき

郭公峯の雲にやましりにしありとはきけとみるよしもなき

からはき　よみ人しらす

空蝉のからは木ことにとゝむれとたまのゆくへをみぬそかなしき

かはなくさ　ふかやふ

うは玉の夢になにかはなくさまむうつゝにたにもあかぬ心を

さかりこけ　高向とし春

花の色はたゝひとさかりこけれとも返々そ露はそめける

にかたけ　志け春

命とて露をたのむにかたけれはものわひしらになく野への虫

かはたけ　かけのりのおほきみ

さ夜ふけてなかはたけゆく久方の月吹かへせ秋の山風

わらひ　志んせいほうし

煙たちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびと名づけそめけん

ささ　まつ　びは　ばせをば

きのめのと

いささめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつつ

なし　なつめ　くるみ

兵衛

あぢきなしなげきなつめそうき事にあひくる身をばすてぬものから

からことといふ所にて春の立ける日よめる

安倍清行朝臣

浪の音のけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまるらん

いかがさき

兼覧王

かぢにあたる浪のしづくを春なればいかがさきちる花と見ざらん

からさき　阿保経覧

かの方にいつからさきにわたりけん浪路は跡ものこらざりけり

かはなぐさ

伊勢

浪の花沖からさきてちりくめり水の春とは風やなるらん

かみやがは　貫之

うば玉のわが黒髪やかはるらん鏡の影にふれる白雪

よど河

あしびきの山べにいまはすみぞめの衣の袖はひる時もなし

かたの　　　たゝみね

夏草のうへはしけれるぬま水のゆくかたのなき我こゝろかな

かつらの宮　　源ほとこす

秋くれと月のかつらのみやはなる光を花とちらすはかりを

百和香　　よみ人しらす

花ことにあかすちらしゝ風なれはいくそはくわかうしとかは思ふ

すみなかし　　志けはる

春霞なかしかよひちなかりせは秋くるかりはかへらさらまし

をき火　　みやこのよしか　都良香

なかれいつる方たにみえぬ涙河おきひむ時やそこは志られん

ちまき　　大江千里

のちまきのおくれておふるなへなれとあたにはならぬたのみとそきく

はをはしめるをはてにてなかめをかけて時の歌よめと人のいひけれはよみける

僧正聖寶

花の中めにあくやとてわけゆけは心そともにちりぬへらなる

古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　よみ人しらす

郭公なくやさ月のあやめくさあやめもしらぬこひもする哉

素性法師

をとにのみきくのしら露夜はおきてひるはおもひにあへすけぬへし

紀貫之

吉野河いはなみたかくゆく水のはやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白浪のあとなき方にゆく舟も風そたよりのしるへなりける

在原元方

音羽山をとにきゝつゝ相坂の関のこなたに年をふるかな

立かへりあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

つらゆき

世中はかくこそありけれ吹風のめに見ぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひにたてたりける車のしたすたれより女のかほのほのかに見えけれはよむてつかはしける

在原業平朝臣

見すもあらす見もせぬ人のこひしくはあやなくけふやなかめくらさん

返し　　　　　　よみ人しらす

しらしらもおもひやかてこえていへん思ひしと我しらん人なれ

かすかの田へのにまかりける女の許より物見に出て

ある女の許より家をたつねてつかはせりけれ

みふのたゝみね

おとろかく宮海をこえておもひそくる夢見るにのみ忘ても

人の花はなれて春のかへりてとしこそありけれ

ひとりのみになりてはなれてはかなけれ

清原中秀

山櫻手すさひの山らかれのあはれてゝ人の袖をしかれ

題しらす　　　　　元良のみこ

たなはたにあらぬ我身のなそもかく年にまれなる人をまつらん

凡河内みつね

ちりぬれは花の殺をもとふらむなみの色にいてたるをまつらん

津守輔秀

我事はたのみけるかなみなの袖のつれにさへていさ(さ)なき

よみ人しらす

飛ことをこはしにかけて人はしらぬをとおもふものを

久しくは色に見えてよ思ふとも川となる人をとふらて

あり出もかの思ひて待て我ならていもしらぬや人をしつらき

海道もまた人をや招く白露のおくとみえけるさゆるとハ
ちはやぶるかもの社のまへにて見ぬ所とはしる哉
我恋ハむかしの秋にみちぬらし思ひ事とも招くらん
すりのたなかたこの浦辺にてあけ月は名も立ぬ名に
出にし日にやまとの梅のいはねもとらぬ恋しすらん
月は花の山下の風にこそ流れたまれぬ世にそ招つ
吉野河いはをきりて流れ行水の音にはたてしとしらぬと
瀧津せの中にもよとみてふをと知る我恋の淵瀬ぞすむき
山高き雲の行方のさるのほかれてよひ人迄もみなと共
こゑならぬ夜もみ出のかたは浦しいてはかれ野辺道にまた

人しれぬ思ひハ心つくし花の名なりいてたる人
秋の野に花の色は物しらぬ花の色もやまみる人のとふらしを
こゝのそろ梅の香のえに鶯の招きによりきてこひもとまる
月は花の山嵐を吹おろしてや恋は恋つゝ招きてよする
春風のをりかほる花のつまのせて我身下さそを
庭をしとそこしぬせしみる来ぬのこけてや嫁によりも
おもひ道にて事くしいかなふ人とそめ恋のそれのつき招きせん
松のみい思ひの事花に須をまけの名もいてしと思ひ地と
我恋をと人しらぬやまの住のまえとしらぬしらぬ秋
いさらゆみのねとかつ也の東みとの道にて人しらぬやそ人小

人道ぬ恩を報じ給へしうきみ由りと申されしに御ふしより
なりふとも出ずとも有け無ね世やゆふてまたおくさうろ細
任でさわ方を人のこりやおぢ為井の程に見る所にしおりさ
伴蝶や海よつりとろおまた見るを包れや色ほりを定め後方
世の方の先に何由のつりおい升かて今もりと見るも恩ひやさら無
版河を小みなりと露なを帆也時のつとろおろわりる
無私お道ハて為くれ松ハ垣しよろ歩むととい有るさ
おさ乱くとい河霧ふ見にしのをうとそ世のおろ無世わりら
やとろ海も時しおけ道ハ行とのひの宏よれて移をのそて
底衣ひし移ふ窓にしまり時ハ庭て地き人をあひりし来

よむく井花に無かたきしいろふ移り春の暮に至りん
至しきよ余をとりて施かりこそ志よやともろく地を出る分
人の身をかゝはし地をとかさ深すでにさ色無ニ程も志ると
志のう道ハうし未物を人の道とて昔ふて師事誰れかなん
二無世にしさや成みてんあのまへ人よつ道をきて人と昔と云む
清道もおかれ人をこうて宏いこうきとろ雨て難行方無
移くみよおとろく見るも又実ハ花も世人をおりふわりる
人を背ふハ我よおろ移や身の津ふことに志て道をきれん
思ひろさろいはろのよ欲やとろ由をふ蒼路よおふ人の様
夢文風のりにしおいろへとをたのさつくろを得よいハ移人本

逢し様とせしやさかへしもしも面影よりかすかには夢にみて
涙の枕かはくまもなき様をは夢ゆへに思ひしかと見えても消なき心
逢とされは我身は様しと共よ人のゆきとて人よそへたる心地せ
かくてはよそなる命も我袖をもらへし涙の海よりこそ浮ん
世の無常の様とかの身のまとはれ来ては深れて下にはまた沈みなん
はや来世よりの事なりしかは我袖の涙の河なる人まて沈をは
ならん人はもとのものは玉もとの涙なる人の世の道てのみや逢わかれん
あはれともみえさはく人は河の心ともこの心ゆるやくとかく思ひそめて
人の心道の思ひをつ様よせらるる深ゆゑにも山をそて我身のうき道
こふる心もきえもなくも来ゆらぬ奥山の奥さへ答ぬ人の心をうらみ

いふさの中のおもひつきをさして我かたく人や恋し来様のうきてそかくも
桐坂なる堂にあるかゝふそしありとそ行きかはそひとも晴れ
うち来寄み人の人の恋つるかの淵かき尾ある物の来を色をとおかもさ
打まとひてよはくんく恋よ山にいこのさく人ある山はなつ様と逢
むかし命せる物あまりのものかくなくは人をも来由の人ある人をも恋
よ我あはれさらに道はくなう道にいもかの間をよりさかとひて人
春にてはこの世の物の物あて恋る色てはかれりに流みん
おもはそて人の世にもあまりは人の来く侘むは哀なれとこそ
夏の雨の身をとそ流る毎にそてゝ来いつと別思よりて恋しき細
ゆかされはそてにひかふ我袖よ秋の露こそ人に来てきて

いつとても恋しからすはあらねとも秋の夕へはあやしかりけり

秋の田のほにこそ人をこひさらめなとか心にわすれしもせん

秋の田のほのうへをてらすいなつまのひかりのまにも我やわするゝ

人めもる我かはあやな花すゝきなとかほにいてゝ恋すしもあらん

あは雪のたまれはかてにくたけつゝ我物おもひのしけき比かな

おく山のすかのねしのきふる雪のけぬとかいはむ恋のしけきに

未了

古今和歌集巻第十二

恋歌二

題しらす　小野小町

思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて恋しき時はむは玉のよるの衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに

しもついつもてらに人のわさしける日真せい法師のたうしにていへりけることはを哥によみて

たのみこし梅のこもとにうつけそへり花あはれ

むかしの秀よし中將朝臣

はるかとも袖にたまらぬなみたのまゝにはなやめの涙なりけり

返し

こゆり

たえのみの涙そ袖にかゝるなれ我はせきあへぬ涙の瀧そなかれて

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

遊まよひてうらわかのおもしに秋かせふく萩のちりはうつらなかなく

すゑの露はさえ落にしらぬはつゆや萩のからひらく今なく鶉

たえぬるよし来

吾妻はみな山さくらの単なりやさけさ海さなれと人のかさ

紀とものり

よそにみしもはなのちくみやまの夏草に迷ふ道のあさこゝろ

松かさ迷ひは堂に我けるをはれとも定めてふやへにつまかたの來

川の葉のをとく萩のもしらぬもの我衣は秋の風そなく

我宿との菊みのきくのにしほく露のきてくありて秋のさかりかくる

河の瀬によひくまもみゝくまて人めなく玉ぬ風ひとつきたる

みちのくのちきのくさの秋

かきくらし雪の白雪みえ下さこにし来空て秋のにちかきも絶れ

藤原行成朝臣

春たつの霞乃衣よみりなきハみなとれてしも秋ハ姫名は
春山の命ハ青くやすらしとのみよむのをいりかさむとて かへん
なひ糸ハ志かて是人とへとも夢とふ知ぬ人ハ何のゆかり
よみ人しらず
わりなくて袖をもさめても逢し春の乞をいのり風もえ まづまて
逢し君にはとひてたましめ達あハむかし春かりも春やあり ちらつせ
作らず中務
春ミつの霞しなくいかゝ衣も孫も多くハ多くも見え溜は
読人しらず
世をかくれてそ行霞は冬もこ濃くるみすき嫁ぬ

帝路にも霧やかく説く絶乗かる西袖のひまてかへりぬ
与謝ハ清し
はかなくて桜ちにはも人をとゝも乗ハ朝の床かおきさそらむ
素性はかりなく嬉さ
ハ流れりの燃えりせハ気も衣者のひよ袖ハ志かくれは
大江千里
秋雨やきてハ地毎しほとも春ゆ毎ふ夕暮に袖とくはまさ なん
在原の朝臣
秋もくもやかく来都の時そうかく来くてたなく鏡
作者しらず

さ月やみここゑをたかく郭公なく森かなの恋しかる
る

白河院みこ孫

秋霧に風の時雨に時そあらぬもみちにまよふ秋の山かな

清原元輔か母

むすひおく契もそてにしほれつつ人にしらせぬ恋もするかな

これほとのみちのくの家に命合らの母

よみ人しらす

頼めおくことのはにのみかゝりつつまつ夜更ぬる月をみるかな

題しらす

津守国基

あき果てうつろふ花のみちくさにかへる

定なき物をきくは秋の田に[illegible]

みつね

人をおもふ心は雲のかなたまて[illegible]

まきのや母

頼風にかなしき心をもさそふ[illegible]

きよみ孫

津守国比

思ひあまり[illegible]

やまとにし侍りける人[illegible]

郭公[illegible]

風よりは詠む物みなといはかりの人の詠よ文人
ゆかりつゝせうそこすときゝてよこしてはへりける
露かゝる女が紙花にさしそへて風流をかしに物思ひつく
髪おろしてと
坂上これのり
我越よく女の山の桜花ゆかしくちるとも数は紙のゆ
むまごとかみれおもひけり
冬河の人はさかりまろ我なしやさしにおれて遊ぶらん
女みみ孫
識津せしに孫とうしとぬぬら紀等みら夫くの遊ぶ我はかな
生ての里

よ井くふぬ案て我ゐのかり衣のきそて思ふ気みのまほ
あれはなれ凡やのたつら山中くふかれしらんと思ひそあるまし
三実母への花のさくに海はあさとと人をみつあはれしをそさけり
多くをてききぬぬ思はしきかれよろれ秋はあはにあり有里
作り程実
我越は志ゝ女山路よおりかくに迷ひ越をおひもりけり
紀乃ありいてつかゝ秋のをゆれたこ紀冬ゆきみれ
志らむとみえ女をしき宿遊はかゝる紀ようつろひゆき里
みれ孫
存むしとを不かはいし女せもりけれも都ゆよりそまさへ

さうみ孫

風市昔ハ顔のゆのちゝ雲丸堂てつまをかれ念のいの宗
月影の吾身をかゝる松かけハつまをさき人もおとれ也と散

市ゟや梅

遠しかハそのおハたち世中の常か清地とこいハ千とせも

つゝ松葉

松津国の母もしおもゝのそゝけるに若けさ秋な人さるや
手に宿て月のいほりにもちさ雨も物のさき梅しけれハこそ孫ら書
人きる宿をむかしたに秋をひ出れおゝるひけさとの我のとそさる

ちさ女里

ちくふてうそね詩花み色世の花まよらして遠し来ぬとも

見津ね

名をもさを思孫まれし実すれハよその色も花みつの威名
命やも海さりて村しくもの梅ハ見ハそのね暮れさむ月の織

ちうみ孫

はるみちの津々木
様ちもいまハなき末のかもにやるゝ秋を海されき遠乃かを

見川孫

我遠ハ秋くもしちゝとけてまかしおかるを浪をちそろそ
ほしかのゝ秋を悲ちる昔のいかにおゝしもおけてなくちるほし
みゆれて

今はゝや恋しなましをあひみむとたのめしことそ命なりける

ふかやふ

たのめつゝあはて年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ

凡河内みつね

命やはなにそは露のあた物をあふにしかへはをしからなくに

とものり

古今和歌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちよりしのひに人にものらいひてのちに雨のそほふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせすねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはしける

とし行朝臣

つれ〳〵のなかめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返しによめる

なりひらの朝臣
あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまん
題しらず　よみ人しらず
よるへなみ身をこそとをく隔つれ心は君か影となりにき
いたつらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいさなはれつゝ
あはぬ夜のふる白雪とつもりなは我さへともにけぬへき物を
このうたはある人のいはく柿本人丸か哥也
なりひらの朝臣
秋のゝにさゝわけしあさの袖よりもあはてこし夜そひちまさりける
小野小町

みるめなき我身をうらとしらねはやかれなてあまの足たゆくくる
源宗于朝臣
あはすしてこよひあけなは春の日のなかくや人をつらしと思はむ
みふのたゝみね
有明のつれなくみえし別より暁はかりうき物はなし
在原元方
あふ事のなきさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりける
よみ人しらす
かねてより風にさきたつ浪なれやあふ事なきにまたき立らん
たゝみね

みちのくにしほかまといふ所に似たる所なかりけり
見けるのおとこすきを
あやしくてさきの右大臣の田にすみてやまともおほくよ
きゝて
人のいさめけるを思ひはゝかりけれはむもれきてしのひてとふらひ(ゑん)
よみ人しらす
ちりぬ海よりもさはかれなるは土佐(?)しくらの世にしはなれは
はむしらの五條のきさきのみやにありける人をとらへて海の色
かよひけるしのひたるをとこの来けれは見えしともえいは
ねてかへりけるを車のうちよりかよひける道をあさしつき
みちあれはなかるゝまてつゐそかからみにゝかくにしれこに
人をわすれて海りくちにしれはつゐそめしれともえあけしの
見りてよ見えてありけれ
みやしろの郭居
人まねの我かよしのゝ山なるはよそにしてこそしらぬも猶なほ世
題しらす
清原中務
しけれともふしきりはおかしけれは山の月のみえて絶
よみ人しらす
さしてきしゆくゝ我を相坂の中におもひてあなたすらもおもひ
あさみこほり

秋の夜も名のみなりけりあふといへハ事そともなく明ぬるものを

凡河内みつね

長しとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

よみ人しらす

しのゝめのほからほからとあけゆけはおのかきぬ〳〵なるそかなしき

藤原国経朝臣

明ぬとて今ハの心つくからになといひしらぬおもひそふらん

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原敏行朝臣

明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ

題しらす

寵 一説ウツク 一説チヨウ用之

しのゝめのわかれをおしみ我そまつ鳥よりさきになきはしめつる

よみ人しらす

郭公夢かうつゝか朝露のおきてわかれし暁のこゑ

玉くしけあけハ君か名たちぬへみ夜ふかくこしを人みけんかも

大江千里

今朝ハしもおきけん方もしらさりつ思ひ出るそきえてかなしき

人にあひてあしたによみてつかはしける

なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまとろめハいやはかなにもなりまさるかな

業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける時
斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やる
すへなくて思ひをりけるあひたに女のもとよりおこ
せたりける　よみ人しらす

君やこし我や行けむおもほえす夢かうつゝかねてかさめてか

返し　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとは世人さためよ

題しらす　よみ人しらす

むは玉のやみのうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらさりけり

さ夜ふけて天のと渡る月影にあかすも君をあひみつるかな

君か名も我名もたてし難波なるみつともいふなあひきともいはし

名取河せゝのむもれ木あらはれはいかにせむとかあひみそめけむ

吉野河みつの心ははやくとも滝の音にはたてしとそ思ふ

恋しくはしたにを思へ紫のねすりの衣色にいつなゆめ

をのゝはるかせ

花すゝきほにいてゝこひは名をおしみしたゆふ紐のむすほゝれつゝ

橘のきよきかしのひにあひしれりける女のもとよりおこせたりける　よみ人しらす

おもふとちひとりひとりかこひしなはたれによそへて藤衣きむ

返し　橘のきよき

なきこふる涙に袖のそほちなはぬきかへかてらよるこそはきめ

題しらす　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしさ

限なき思ひのまゝによるもこむ夢路をさへに人はとかめし

夢路にはあしもやすめすかよへともうつゝにひとめみしことはあらす

よみ人しらす

おもへとも人めつゝみのたかけれは河とみなからえこそわたらね

たきつせのはやき心をなにしかも人めつゝみのせきとゝむらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　とものり

紅の色にはいてしかくれぬの下にかよひてこひはしぬとも

題しらす　みつね

冬の池にすむにほとりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな

さゝの葉におく初霜の夜をさむみしみはつくとも色にいてめや

よみ人しらす

やましなのおとはの山のおとにたに人のしるへく我こひめかも

この歌ある人あふみのうねめのとなん申す

きよはらのふかやふ

みつしほのなかれひるまをあひかたみみるめの浦によるをこそまて

平定文

しら河のしらすともいはしそこきよみなかれて世々にすまむと思へは

とも則

下にのみこふれはくるし玉のをのたえてみたれむ人なとかめそ

我恋をしのひかねてはあしひきの山たちはなの色にいてぬへし

よみ人しらす

おほかたは我名もみなとこきいてなむ世をうみへたにみるめすくなし

平定文

枕より又しる人もなき恋をなみたせきあへすもらしつるかな

よみ人しらす

風吹は浪うつきしの松なれやねにあらはれてなきぬへらなり

この歌はある人のいはく柿本人まろかなり

池にすむ名ををしとりの水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

逢事は玉のをはかりなのたつはよしのの河のたきつせのこと

むら鳥のたちにし我名今更にことなしふともしるしあらめや

君により我名は花に春霞野にも山にもたちみちにけり

伊勢

しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名のそらにたつらむ

古今和歌集巻第十四

恋哥四

題しらす　　よみ人しらす

みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらん

あひみすはこひしき事もなからましおとにそ人をきくへかりける

つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかにみすはこひしと思はましやは

ふちはらのたゝゆき

君といへはみまれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆるわかこひ

伊勢

夢にたにみゆとはみえしあさなあさなわかおもかけにはつる身なれは

よみ人しらす

石間ゆく水のしら浪立かへりかくこそはみめあかすもあるかな

伊勢のあまのあさなゆふなにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

とものり

春霞たなひく山のさくら花みれともあかぬ君にもあるかな

ふかやふ

心をそわりなき物と思ひぬるみるものからやこひしかるへき

凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆるかな

よみ人しらず

わたる河関は瀬よりも世にありて思ひ渡らん人をこそまてし

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

みちて出てみよの[illegible]や秋をへて[illegible]物[illegible]

さらぬ[illegible]

さむしろに衣かたしき今夜もや恋しき人にあはてのみねむ

みかきのたまひの

衣やは[illegible]やをむなの[illegible]のくさ[illegible]の[illegible]をひそ[illegible]

うきよ[illegible]

は[illegible]もとにし[illegible]長月のありあけの月をまちいでつるかな

よみ人しらず

月みれはかしこき人のつきを[illegible]こそ[illegible]の海さす

衣こそ[illegible]あまのいつしかこ[illegible]ゆくへ[illegible]

[illegible]のなかをみるに[illegible]をわけの風を[illegible]て衣を

かなしくもみてしかも山の[illegible]つきのかなしけれ

[illegible]のくれに[illegible]思ひて山[illegible]のこはかなし[illegible]人事を

[illegible]

[illegible]やまとは[illegible]をかね[illegible]衣ともつとてあふ[illegible]

[illegible]やま

[illegible]しとは[illegible]つゝ[illegible]人事[illegible]人[illegible]とそ[illegible]

よみ人しらず

みよしのゝ大川のへの藤なみのなみにおもはゝ我恋めやは

かくこひん物とは我も思ひにき心のうらそまさしかりける

あまの原ふみとゝろかしなる神も思ふなかをはさくる物かは

梓弓ひきのゝつゝら末つひに我思ふ人に事のしけゝん

この歌はある人あめのみかとの近江のうねめに
たまひけるとなん申

夏ひきのてひきの糸をくりかへし事しけくともたえんと思ふな

この歌は返しによみてたてまつりけるとなん

里人の事は夏野のしけくともかれゆく君にあはさらめやは

藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける
女をあひしりて文つかはせりけることはに
いままうてく雨のふりけるをなんみわつらひ侍ると
いへりけるをきゝてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かすかすに思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

ある女の業平朝臣を所さためすありきす
と思ひてよみてつかはしける

よみ人しらす

おほぬさのひくてあまたになりぬれは思へとえこそたのまさりけれ

返し

おほぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふものを　なりひらの朝臣

題しらす　よみ人しらす

すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにける

玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

たか里によかれをしてかほとゝきすたゝこゝにしもねたる声する

いて人は事のみそよき月草のうつし心はいろことにして

いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし

いつはりとおもふものから今さらにたかまことをか我はたのまん

素性法師

秋風に山の木のはのうつろへは人の心もいかゝとそ思ふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　とものり

蝉の声きけはかなしな夏衣うすくや人のならんと思へは

題しらす　よみ人しらす

うつせみの世の人事のしけゝれはわすれぬものゝかれぬへらなり

あかてこそおもはん中ははなれなめそをたにのちのわすれかたみに

わすれなんと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそこひしき

わすれなん我をうらむなほとゝきす人の秋にはあはんともせす

たえすゆくあすかの河のよとみなは心あるとや人のおもはん

この哥ある人のいはくなかとみのあつま人かうた也

よと河のよとむと人はみるらめとなかれてふかき心ある物を

そせいほうし

そこひなき淵やはさはく山河の浅き瀬にこそあたなみはたて

よみ人しらす

紅のはつ花そめの色ふかく思ひし心われわすれめや

河原左大臣 融

みちのくのしのふもちすりたれゆへに乱そめにし我ならなくに

よみ人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる

ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋の紅葉ならねは

小野小町

あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみむとのみ人のいふらむ

しもつけのをむね

くもり日のかけとしなれる我なれは目にこそ見えね身をははなれす

つらゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはむとはおもほえなくに

よみ人しらす

めつらしき人を見むとやしかもせぬ我下ひものとけわたるらむ

かけろふのそれかあらぬか春雨のふる日となれは袖そぬれぬる

おりにつけたる言とも申事侍りし人の思忘なん

伊勢

見てみしもあまたになりにしと夜にまことはかなき夢ありける（うらみも）

清ゝ樹素

伊勢の人に物言ひ侍りけるを聞てし物いひ侍りける
人をとのいみあかしてあかつきにかくなんいひ侍りし
の家なんありを侍りける時にかく侍りける
なくさめてよみてつかはしける

大伴くろぬし

思ひきや恋しきことにつらきかなあはれとは人のいふまてや

左乃君はいまうち来ことす海て嵐よあれはかなく
むかしをこ忘のあふことに紙にかきあつめて
をとこてよみてたてまつる

典侍藤原よるかの朝臣

毎風あらしても風も今は絶てん我身ひとつのなかしなと来ぬ

返し

今はとて人をおもての葉はかはりけるいかにとこその物うけ形見なるらん

近院の右のおほいまうちきみ（能有 文徳源氏 右大臣 左大将）

題しらす

これひらの朝臣

武杵の道は常にて恋しなん人をとふとも秋のよはたゝもむなし
とみ給ひても

まてといはゝねてもゆかなんしひて行駒のあしをれまへのたなはし

中納言源ののほるの朝臣のあふみのすけに侍ける時よみてやれりける

昇 延喜八年中納言 十四年大納言

閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらはこそ君かゆきゝをなくなくもみめ

題しらず　伊勢

ふるさとにあらぬ物からわかために人の心のあれてみゆらん

寵

山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし

さかゐのひとさね 酒井人真

おほそらはこひしき人のかたみかは物思ふことになかめらるらん

よみ人しらず

あふまてのかたみも我はなにせむにみても心のなくさまなくに

おやのまもりける人のむすめにいとしのひにあひて物いひける間におやのよふといひけれはいそきかへるとてもをなんぬきおきていりにけるその後もをかへすとてよめる

興風

あふまてのかたみとてこそとゝめけめ涙にうかふもくつなりけり

題しらず

よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくは
わするゝ時もあらまし物を

古今和歌集巻第十五

恋哥五

五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人に
ほいにはあらてものいひわたりけるを、む月のとを
かあまりになんほかへかくれにける、あり所はきゝけれ
とえ物もいはて、又のとしのはるむめの花さかりに
月のおもしろかりける夜、こそをこひてかのにし
のたいにいきて月のかたふくまてあはらなるいたしきに
ふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

題しらず　藤原仲平朝臣（枇杷左大臣）

花すゝき我こそしたにおもひしかほにいてゝ人にむすはれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかましものを音羽河わたるとなしにみなれそめけむ

凡河内躬恒

わかことく我をおもはむ人もかなさてもやうきと世をこゝろみむ

元方

久方のあまつそらにもすまなくに人はよそにそおもふへらなる

よみ人しらす

みてもまたまたもみまくのほしけれはなるゝを人はいとふへらなり

友のり

雲もなくなきたる朝の我なれやいとはれてのみ世をはへぬらむ

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらむかすならぬ身は

うきめのみおひてなかるゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

あひにあひて物思ふころの我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

よみ人しらす

秋ならておく白露はねさめする我手枕のしつくなりけり

すまのあまのしほやき衣おさをあらみまとをにあれや君かきまさぬ

山城のよとのわかこもかりにたにこぬ人たのむ我そはかなき

あひ見ねは恋こそまされみなせ河なにゝふかめて思ひそめけん

暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そかすかく

玉かつらいまはたゆとや吹風のをとにも人のきこえさるらん

我袖にまたき時雨のふりぬるは君か心に秋やきぬらん

山の井のあさき心もおもはぬをかけはかりのみ人のみゆらん

わすれ草たねとらましをあふ事のいとかくかたき物としりせは

こふれともあふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひしけるらん

夢にたにあふ事かたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ

兼芸法し

もろこしも夢にみしかはちかゝりき思はぬ中そはるけかりける

さたのゝほる　貞朝臣登 備中守 仁明御子

ひとりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そおひける

僧正へんせう

我宿は道もなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに

今こんといひて別し朝よりおもひくらしのねをのみそなく

よみ人しらす

こめやとは思ふものからひくらしのなくゆふくれはたちまたれつゝ

いましはとわひにし物をさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

今はこしと思ふ物から忘れつゝまたるゝ事のまたもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわひつゝもねん

うへていにし秋田かるまてみえこねはけさはつかりのねにそなきぬる

こぬ人をまつ夕くれの秋風はいかにふけはかわひしかるらん

ひさしくもなりにけるかなすみの江の松はくるしき物にそありける

かねみのおほきみ

住の江の松ほとひさになりぬれはあしたつのねになかぬ日はなし

なかひらの朝臣あひしりて侍けるをかれかたに
なりにけれはちゝかやまとのかみに侍けるもとへ
まかるとてよみてつかはしける

伊勢

みわの山いかにまちみむとしふともたつぬる人もあらしと思へは

雲林院のみこ 常康親王 仁明御子

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の
をもくこゝろ

今はとて我身時雨にふりぬれは事のはさへにうつろひにけり

小野小町

貞樹

人を思ふ心のこのはにあらはこそ風のまにまにちりもみたれめ

なりひらの朝臣きのありつねかむすめにすみけるを
うらむる事ありてしはしのあひたひるはきて

きて夕さりはかへりのみしけれはよみてつかはしける
あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめには見ゆるものから
返し　なりひらの朝臣
行かへり空にのみしてふることはわかゐる山の風はやみなり
題しらす　かけのりのおほきみ
唐衣なれは身にこそまとはれめかけてのみやは恋むと思し
とものり
秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん
源宗于朝臣
つれもなく成行人のことのはそ秋よりさきの紅葉なりける

心ちそこなへりけるころあひしりて侍ける人の
とはてここちおこたりて後とふらへりけれは
よみてつかはしける
兵衛　藤原高経朝臣女
しての山ふもとを見てそかへりにしつらき人よりまつこえしとて
あひしれりける人のやうやくかれかたになりけるあひたに
やけたる茅の葉にふみをさしてつ
かはせりける　小野小町かあね
時すきてかれゆくをのゝあさちには今は思ひそたえすもえける
物思ひけるころ物へまかりける道に野火のもえけるを

野火をみてよめる　　伊勢

冬枯の野へと我身を思ひせはもえても春をまたまし物を

題しらす　　とものり

水のあはのきえてうき身といひなから流て猶もたのまるゝ哉

よみ人しらす

みなせ河ありて行水なくはこそつゐに我身をたえぬと思はめ

みつね

よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてし事は忘れし

よみ人しらす

世中の人の心は花そめのうつろひやすき色にそ有ける

心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事もおしからましや

こまち

色見えてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける

よみ人しらす

我のみや世をうくひすとなきわひん人の心の花とちりなは

そせい法し

思ふともかれなん人をいかゝせんあかすちりぬる花とこそみめ

よみ人しらす

今はとて君かかれなは我宿の花をはひとりみてやしのはん

むねゆきのあそん
わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなん
寛平御時御屏風に歌かゝせ給ける時
よみてかきける
そせい法し
忘草なにをかたねとおもひしはつれなき人の心なりけり
題しらす
秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらん
きのつらゆき
はつかりのなきこそわたれ世中の人の心の秋しうけれは

よみ人しらす
あはれともうしとも物を思ふ時なとか涙のいとなかるらん
身をうしと思ふにきえぬ物なれはかくてもへぬる世にこそありけれ
典侍藤原なほいこの朝臣 直子
あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をはうらみし
いなはこ かしよみきこえの女
あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひしらすもとくるひもかな
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
すかのゝたゝおむ 忠臣
つれなきを今は恋しと思へとも心よはくもおつるなみたか

題しらず　伊勢

人しれず絶なましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

よみ人しらず

それをだに思ふ事とて我宿をみきとないひそ人のきかくに

逢事のもはら絶ぬる時にこそ人の恋しき事もしりけれ

わびはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらん

藤原興風

怨てもなきてもいはむ方ぞなき鏡にみゆる影ならずして

よみ人しらず

夕されば人なき床を打はらひなげかむためとなれる我身か

わたつみの我身こす浪立かへりあまのすむてふうらみつるかな

あらを田をあらすき返しかへしても人の心をみてこそやまめ

有そ海の浜のまさごとたのめしは忘るゝ事の数にぞありける

葦辺より雲ゐをさして行雁のいやとほざかる我身かなしも

時雨つゝもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき

秋風の吹と吹ぬる武蔵野はなべて草葉の色かはりけり

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしく成ぬと思へば

平貞文

秋風の吹うらかへすくずの葉のうらみても猶うらめしき哉

よみ人しらす

秋といへハよそにそきゝしあた人の我をふるせる名にこそ ありけれ

わすらるゝ身をうち橋の中たえて人もかよはぬ年そへにける

みなし河のたえしに人もかよはに

坂上これのり

逢事をなからの橋のなからへて恋わたるまに年そへにける

とものり

うきなからきぬるあはとも成なん流てとたにたのまね 身ハ

よみ人しらす

なかれてハいもせの山の中におつる吉野の河のよしや世中

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりにける時よみける

小野たかむらの朝臣

なく涙雨とふらなんわたり河水まさりなはかへりくるかに

さきのおほきおほいまうちきみを白河のあたりにおくりける夜よめる　忠仁公

そせい法し

延喜式云太政大臣正一人
仍雖非前官不下言

ちの涙おちてそたきつ白河は君か世まての名にこそありけれ

昭宣公　寛平三年正月薨五十六太政大臣関白始

ほり河のおほきおほいまうちきみ身まかりにける時に深草の山におさめてける後によみける

僧都勝延

空蝉はからを見つゝもなくさめつ深草の山煙たにたて

かむつけのみねを　岑雄

深草の野への桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家につかはしける

きのとものり

ねても見ゆねてもみえけりおほかたはうつせみの世そ夢には有ける

あひしれりける人の身まかりにけれはよめる

きのはら中孫

長らへて又此ころの世中よりもあはれと思ひけるかな

あひみし後の男の人のかたみのやけの月かりよみ

みぶのたゞみ孫

めづらしや見るとのみや長らへてひと世をまつとも

恋孫の男なりにあり月よみ

ゆめとさけは関と越てもよしとこのわかれをなかしむなしき

藤原道房のむすめ

ひとりねて待つる人の身ゆめのまにあかつきまでひとりのはてそよみ

閑院

さ衣ころもかたしきのやどりさひしきゆきのそらにふるかな

紀友則の男あはれに有月よみ

清原輔孫

わがなかの月と思へと言ながらたれ人をさへ見ありあれ

みぶのたゞみ孫

時しもあれ越の人のまつきあかつきをみつさに逢ひ来ぬと

ちくの花しはてよみ

凡河内みつね孫

神無月時雨にぬれて紅葉さへ散りてまたいく人の心たりとあるか

ちくの花ありはてよ歌

ただみね

藤衣はつるゝいとはわび人の涙の玉のをとぞなりける

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりける道にてよめる

つらゆき

あさつゆのおくての山田かりそめにうき世中をおもひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる

ただみね

墨染の君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

女の親のおもひにて山寺に侍りけるをある人のとぶらひつかはせりければ返事によめる

よみ人しらず

あしひきの山べにいまはすみぞめの衣の袖はひる時もなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

水のおもにしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

深草（仁明）のみかどの御国忌の日よめる

文屋やすひで

草ふかき霞の谷にかげかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

ふかくさのみかどの御時に蔵人頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇になりにければさらに世にもまじらずしてひえの山

世をもゆるしてひえの山にのほりてかしら
おろしてけりそのまたのとしみな人御ふくぬきて
あるはかうふりたまはりなとよろこひけるをききて
よめる
僧正遍昭　俗名左近少将良岑宗貞
みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきたにせよ
融　嵯峨源氏　寛平七年八月廿五日薨　七十三
河原の大臣の身まかりての秋かの
家のほとりをまかりけるにもみちの色また
ふかくもならさりけるをみてかの家によみていれ
たりける
能有　文徳源氏　于時大納言左大将宇多皇太子傅
近院右のおほいまうちきみ
うちつけにさひしくもあるかもみちはもぬしなきやとは色なかりけり

藤原高経朝臣の身まかりての又の年の夏
ほとときすのなきけるをききてよめる
つらゆき
郭公けさなくこゑにおとろけは君にわかれし時にそありける
さくらをうゑてありけるにやうやく花さきぬへき
時にかのうゑける人身まかりにけれはその花を
みてよめる　きのもちゆき
花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひんとかみし
あるし身まかりにける人の家の梅の花を
みてよめる
つらゆき

色も香もむかしのこさににほへともうゑけむ人のかけそこひしき

河原のおほいまうちきみの身まかりてのち
かの家にまかりてありけるにしほかまといふ所
のさまをつくれりけるをみてよめる　つらゆき

君まさて煙たえにししほかまのうらさひしくもみえわたるかな

藤原のとしもと（利基　内大臣高藤兄）の朝臣の右近中将にて住侍ける
曹司の身まかりて後人もすますなりにけるに
秋の夜ふけてものよりまうて来けるに
ついてに見入れけれはもとありしせんさいもいと
しけくあれたりけるをみてはやくそこに侍
けれは昔を思やりてよみける　御春有助

君かうへしひとむらすゝき虫のねのしけき野へともなりにけるかな

これたかのみこの父の侍りけむ時によめりけむ
うたともとこひけれはかきておくりける奥によ
みてかけりける

とものり

ことならはことの葉さへもきえなゝむ見れはなみたのたきまさりけり

題しらす

よみ人しらす

なき人のやとにかよはゝ郭公かけてねにのみなくとつけなむ

たれみよと花さけるらん白雲のたつのとはやくなりにしものを

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるを
いくはくもあらて女みこの身まかりにける時に
かのみこすみける帳のかたひらのひもに文
をゆひつけたりけるをとりて見れはむかしの手
にてこの哥をなんかきつけたりける

かすかすに我をわすれぬものならは山のかすみをあはれとはみよ

をとこの人のくにゝまかれりけるまに女にはかに
やまひをしていとよはくなりにける時よみおきて
身まかりにける　よみ人しらす

声をたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねん君そかなしき

やまひにわつらひ侍りける秋心ちのたのもしけなく
おほえけれはよみて人のもとにつかはしける

大江千里

もみち葉を風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

身まかりなんとてよめる

藤原これもと

露をなとあたなるものと思ひけん我身も草におかぬ許を

やまひしてよはくなりにける時よめる

なりひらの朝臣

つひにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとは思はさりしを
かひのくにゝあひしりて侍ける人とふらはむとて
まかりけるを道なかにてにはかにやまひをしていま〳〵と
なりにけれはよみて京にもてまかりて母に
見せよといひて人につけ侍りけるうた
在原しけはる
かりそめの行かひちとそ思ひこし今はかきりのかとて
なりけり

古今和歌集巻第十七

雑哥上

題しらす　よみ人しらす

わかうへに露そおくなるあまの河とわたる舟のかいのしつくか

おもふとちまとゐせる夜はから錦たゝまくおしき物にそ有ける

うれしきを何につゝまむから衣たもとゆたかにたてといはましを

かきりなき君かためにとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける

ある人のいはく此哥はさきのおほいまうちきみの也

紫のひともとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそみる

めのおとうとをもて侍ける人にうへのきぬをおくるとて

をくるとてよみてやりける
なりひらの朝臣
紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける
大納言ふちはらのくにつねの朝臣の宰相より中納
国経寛平六年五月五日中納言即従三位
言になりける時そめぬうへのきぬあやをおくるとて
よめる
近院右のおほいまうちきみ
于時大納言右大将 皇太子傅
色なしと人やみるらんむかしよりふかき心にそめてしものを
いそのかみのなむまつか宮つかへもせていそのかみといふ所に
こもり侍りけるをにはかにかうふりたまはれりけれは
よろこひいひつかはすとてよみてつか
はしける
ふるのいまみち
日の光やふしわかねはいその神ふりにし里に花もさきけり
二条のきさきのまた東宮のみやすん所と申ける
高子 貞観八年十二月女御 十年十二月生第一皇子 十一年二月為皇太子
時に大原野にまうてたまひける日よめる
元慶元年正月即位日為中宮 元慶六年為皇太后宮 春宮母儀女御也
なりひらの朝臣
大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいつらめ
五節のまひゝめをみてよめる
よしみねのむねさた
あまつかせ雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとゝめむ
五節のあしたにかんさしの玉のおちたりけるを

みてたかならむととひてよめる

河原の左のおほいまうちきみ

ぬしやたれとへとしらたまいはなくにさらはなへてやあはれと思はん

寛平御時よ人のはらひ侍りけるをのことも

かめをもたせてきさいの宮の御方におほみきの

おろしときこえにたてまつりたりけるをくら人

ともわらひてかめをおまへにもていてゝともかくも

いはすなりにけれはつかひのかへりきてさなむありつると

いひけれはくら人のなかにおくりける

としゆきの朝臣

玉たれのこかめやいつらこよろきのいそのなみわけおきにいてにけり

女ともの見てわらひけれはよめる

兼芸法師

かたちこそみ山かくれのくち木なれ心は花になさはなりなむ

方たかへに人の家にまかれりける時にあるしの

きぬをきせたりけるをあしたにかへすとてよみける

きのとものり

蝉の羽のよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬるかな

題しらす

よみ人しらす

おそくいつる月にもあるかなあしひきの山のあなたもをしむへらなり

我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

なりひらの朝臣

おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人のおいとなるもの

月おもしろしとて凡河内躬恒かまうてきたりけるに

よめる

きのつらゆき

かつ見れとうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらしと思へは

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならていつる月影

題しらす

よみ人しらす

天河雲のみをにてはやけれは光とゝめす月そなかるゝ

あかすして月のかくるゝ山もとはあなたおもてそこひしかりける

これたかのみこのかりしけるともにまかりて

やとりにかへりてよひとよさけをのみものかたりをしけるに

十一日の月もかくれなむとしけるおりにみこゑひて

うちへいりなむとしけれはよみ侍ける

なりひらの朝臣

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなむ

田むらの御時に斎院に侍ける慧子のみこを（母藤列子従五位上是雄女）

はゝあやまちありといひて斎院をかへられむとしけるを

そのことやみにけれは

あま敬信

慧子代始斎院
天安元年二月
廢之退斎年廿
紗不知若是有
竹帝叙元慶五年正月六日薨　以述子為斎院母同惟喬二年而退

らんかし夢かとよ見し事やこにいられいよしなし
右よ敦信の朝臣の母
おほえなくて後よ杖く月業よまれは定らぬ世ともしえをみくよ
頭しら寺　よ見人志らに
伊勢の神姫かうをみてそ水ともかしたるを我はしすれは少く母
いかなる野中の清水ならまれはかのむかしをしる人そくむ
いにしへの志はのかへしまた飛鳥井よ紙ちさりは水はうち
今そはやまて我もむかしをおもこしさる枝く時しかなしかのを
世中よ昔の物は浅の関かはる橋とさしと東成なる
中なにいかなつむ言のしれはなるのこなくてゆ紀ときなかりて

おいかの赤人をりたれは業おいかまては弱もすさまじかりける道
みないかうあさの世のかたしくさ
かくかまては心まうるよ独りとそ一とひてこれにえいてくおいたるよ
なくてかやうみえるたよ風くてかのかならくて我はむかしに帰らる
みなかみにてこのみはのはまへり
たつらぬ老むとりかゝる世門をてあしとさへておもて流とま
これさりの家は昔ありけのみそりのあさとあれよあかる庭
さり流ましにはてしなかの人きりも忘るを思うよけはいやまなはと
こりとしる物なしおもる様は庭月をおもれしかならしとさきる
心ほかるをとむ其へもうつしとふきれしたなりなるもつ道なくさもよろひつ

鏡山いさ立よりて見てゆかむとしへぬる身は老やしぬると

このうたはある人のいはく大伴のくろぬしか也

業平朝臣のはゝのみこ（伊豆内親王 桓武皇女 貞観三年九月薨）長岡にすみ侍ける時なりひら宮つかへすとて時々もえまかりとふらはす侍けれはしはすはかりにはゝのみこのもとよりとみの事とてふみをもてまうてきたりあけて見れはことははなくてありけるうた

老ぬれはさらぬ別もありといへはいよいよ見まくほしき君哉

返し　業平朝臣

世中にさらぬ別のなくもかな千世もとなけく人の子のため

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　在原むねやな

白雪の八重ふりしけるかへる山かへるかへるも老にける哉

おなし御時うへのさふらひにてをのこともに大御酒たまひて大御あそひありけるついてにつかうまつれる　敏行朝臣

老ぬとてなとか我身をせめきけむおいすはけふにあはまし物か

題しらす　よみ人しらす

ちはやふる宇治の橋守なれをしそあはれとはおもふ年のへぬれは

我見ても久しく成ぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん

住吉の岸のひめ松人ならはいくよかへしととはまし物を

梓弓いそへの小松たか世にかよろつ世かねて種をまきけむ

この哥はある人のいはく柿本の人まろか也

かくしつゝ世をやつくさむ高砂のおのへにたてる松ならなくに

藤原おきかせ

誰をかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

よみ人しらす

わたの海のおきつしほあひにうかふあはのきえぬ物からよる方もなし

わたつ海のかさしにさせる白妙の浪もてゆへるあはち嶋山

わたの原よせくる浪のしはしはもみまくのほしき玉津嶋かも

なにはかたしほみちくらしあま衣たみのゝ嶋にたつ鳴わたる

つらゆきかいつみのくにゝ侍ける時にやまとより越まうてきてよみてつかはしける

藤原たゝふさ

君を思ひおきつの浜になくたつの尋くれはそありとたにきく

返し

つらゆき

おきつ浪たかしの浜の浜松の名にこそ君を待わたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

なにはかたおふる玉もをかりそめのあまとそ我はなりぬへらなる

あひしれりける人のすみよしにまうてけるによみてつかはしける

忠岑

みふのたゝみね

すみよしとあまはつくともなかゐすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時たみのゝ島にて雨のふりけるを
よめる　　　　　　　　つらゆき

雨によりたみのゝ島をけふゆけと名にはかくれぬ物にそありける

法皇西河におはしましたりける日つるすにたてりといふことを題にてよませたまひける

ありそ海の浜のまさこを吹風によせてかへる浪そたつ　　又

中務のみこの家の池に舟をつくりておろしはしめてあそひける日法皇御覧しにおはしましけれは

ゆふさりつかたかへりおはしまさむとしけるをりによみてたてまつりける
　　　　　　伊勢

水のうへにうかへる舟の君ならはこゝそとまりといはまし物を

からことゝいふ所にてよめる
　　　　　　真静法し

都まてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける

布引の滝にてよめる　　在原行平朝臣

こきちらす滝の白玉拾ひおきて世のうき時の涙にそかる

布引の滝のもとにて人々あつまりて歌よみける

時よめる　　なりひらの朝臣

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

よしのゝ瀧を見てよめる

承均法師

たがためにひきてさらせる布なれや世をへてみれどとる人もなき

題しらず　　神たい法し

清瀧の瀬々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる

伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

朱雀院のみかど布引の瀧御覧ぜむとて文月の七日の日おはしましてありける時にさぶらふ人々に歌よませ給ひけるによめる

たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし

ひえの山なる音羽の瀧を見てよめる

たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすぢなし

おなじ瀧をよめる

みつね

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

田むらの御時に女房のさふらひにて御屏風のゑ
御らんしけるに瀧おちたりける所おもしろし
これを題にて哥よめとさふらふ人におほせられけれは
よめる　　　三条の町　惟喬親王母

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとハみれと音のきこえぬ

屏風の絵なる花をよめる

つらゆき

さきそめし時よりのちハうちはへて世ハ春なれや色のつねなる

屏風の絵によみあはせてかきける

坂のうへのこれのり

かりてほす山田のいねハこきたれてなきこそわたれ秋のうきを　是則

古今和歌集巻第十八

雑哥下

題しらす　よみ人しらす

世中はなにかつねなるあすか河きのふのふちそけふはせになる

いく世しもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思みたるゝ

かりのくるみねの朝霧はれすのみ思つきせぬ世中のうさ

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあれはまつなけかれぬあなう世中

かひのかみに侍ける時京へまかりのほりける人につかはしける　をのゝさたき

宮こ人いかにとゝはゝ山たかみはれぬ雲ゐにわふとこたへよ

文屋のやすひてみかはのそうに成てあかた見にはえいてたゝしやといひやれりける返事によめる　小野小町

わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思

題しらす

あはれてふ事こそうたて世中を思はなれぬほたしなりけれ

よみ人しらす

あはれてふ事の葉ことにおく露は昔をこふる涙なりけり

世中のうきもつらきもつけなくにまつしる物はなみたなりけり

世中ハ夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれハ

世のなかハいつれかさしてわかならむ行とまるをそやとゝさたむる

山里ハ物のわひしき事こそあれ世のうきよりハすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえすたなひく嶺にたにすめはすみぬる世にこそありけれ

ふるのいまみち

しりにけりきゝてもいとへ世中ハ浪のさはきに風そしくめる

素性法師

いつくにか世をハいとハむ心こそ野にも山にもまとふへらなれ

よみ人しらす

世中ハむかしよりやハうかりけむ我身ひとつのためになれるか

世の中をいとふ山への草木とやあなうの花の色に出にけむ

み吉野の山のあなたにやともかな世のうき時のかくれかにせむ

世にふれはうさこそまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてむ

いかならむ巌の中にすまハかハ世のうき事のきこえこさらむ

あしひきの山のまにまにかくれなむうき世中ハあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし

おなし文字なきうた

もののへのよしな

世のうきめみえぬ山路へいらむにハおもふ人こそほたしなりけれ

山の法師のもとへつかはしける

凡河内みつね

世をすてゝ山に入人山にても猶うき時はいつちゆくらん

物おもひける時いときなき子を見てよめる

今更になにおひいつらん竹の子のうきふししけき世とはしらすや

題しらす　よみ人しらす

世にふれは言の葉しけき呉竹のうきふしことに鶯そなく

木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬへらなり

ある人のいはく高津のみこの哥也　高津内親王 桓武女

我身からうき世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらん

おきの国になかされて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

田むらの御時に事にあたりてつのくにのすまといふ所にこもり侍けるに宮のうちに侍ける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

左近将監とけて侍りける時に女のとふらひにおこせたりける返り事によみてつかはしける

小野春風　寛平二年任 右少将

あまひこのおとつれしとそ今は思ふ我か人かと身をたとる世に

つかさとけて侍りける時よめる

平定文

うき世には門させりとも見えなくになとか我身の出かてにする

ありはてぬ命まつまのほとはかりうき事しけく思はすもかな

みこの宮の帯刀に侍けるを宮つかへつかうまつらすとてとけて侍りける時よめる

みやちのきよき　清樹

つくはねの木のもとことに立そよる春のみ山のかけをこひつゝ

時なりける人のにはかに時なくなりてなけくを見てみつからの

なけきもなくよろこひもなき

ことを思ひてよめる

清原深養父

光なき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思ひもなし

かつらに侍ける時七条の中宮のとはせ給へりける御返事にたてまつれりける

伊勢

久かたの中におひたる里なれは光をのみそたのむへらなる

きのとしさたかあはのすけにまかりける時にむまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時に

ける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくる
まてみえさりけれはつかはしける

なりひらの朝臣

今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかりけり

これたかのみこのもとにまかりかよひけるを
かしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとふらはむ
とてまかりたりけるにひえの山のふもとなりけれは雪
いとふかゝりけりしひてかのむろにまかりいたりておかむ
にいとつれ〳〵としていと物かなしくてかへりまうてき
てよみておくりける

忘ては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは

深草の里にすみ侍りて京へまうてくとて
そこなりける人によみておくりける　業平
年をへてすみこし里をいてゝいなはいとゝ深草野とやなりなん

返し　よみ人しらす
野とならはうつらとなきて年はへむかりにたにやは君はこさらん

題しらす
我を君なにはの浦にありしかはうきめをみつのあまとなりにき
この歌はある人むかしをとこありけるをうなのをとことはすなりにけれは
なにはなるみつのてらにまかりてあまになりてよみてをとこにつかはせりけるとなむいへる

てらにまかりてあまになりてよみておとこに
つかはせりけるとなむいへる

返し
なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなる
今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらして門させりてへ
ともだちのひさしうまうでこざりけるもとによ
みてつかはしける
みつね
水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねをたえてこぬ
人をとはでひさしうありけるおりにあひうらみ
ければよめる
身をすてゝゆきやしにけむおもふより外なる物は心なりけり
むねをかのおほよりがこしよりまうできたりける
時に雪のふりけるをみておのがおもひはこの雪の
ごとくなむつもれるといひけるおりによめる
君がおもひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじと思へば
返し　宗岳大頼
きみをのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆる時ある
こしなりける人につかはしける
きのつらゆき

思ひやるこしの白山しらねとも一夜も夢にこえぬよそなき

題しらす　よみ人しらす

いさゝこに我世はへなむすかはらやふしみの里のあれまくもをし

我庵ハ三わの山もとこひしくハとふらひきませ杉たてる門

きせんほうし

わか庵ハ都のたつみしかそすむ世をうち山と人ハいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけん人のおとつれもせぬ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴ひきけるを

きゝてよみていれたりける

よしみねのむねさた

わひ人のすむへき宿とみるなへになけきくはゝることのねそする

はつせにまうつる道にならの京にやとれりける

時よめる

二條　源いたるの朝臣女

人ふるす里をいとひてこしかともならの都もうき名なりけり

題しらす　よみ人しらす

世中ハいつれかさしてわかならんゆきとまるをそ宿とさたむる

あふさかの嵐の風はさむけれとゆくゑしらねハわひつゝそぬる

風のうへにありかさためぬちりの身ハゆくゑもしらすなりぬへらなり

家をうりてよめる　　伊勢

あすか河淵にもあらぬ我宿もせにかはり行物にそ有ける

つくしに侍ける時にまかりかよひつゝこうちける人の

許に京にかへりまうてきてつかはしける

きのとものり

ふるさとはみしこともあらすをのゝえのくちし所そこひしかりける

女ともたちと物かたりしてわかれてのちにつかはしける

　みちのく　　橘のすなかの女

あかさりし袖のなかにや入にけん我玉しゐのなき心ちする

寛平御時もろこしのはう官にめされて侍ける時に東宮のさふらひにてをのこともさけたうへけるついてによみ侍ける

ふちはらのたゝふさ

なよ竹のよなかきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな

題しらす　　よみ人しらす

風ふけはおきつしら浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん

ある人このうたはむかしやまとのくになりける人のむすめにある人すみわたりけり此女おやもなくなりて家もわるくなりゆくあひたにこのおとこ

かうちの国に人をあひしりてかよひつゝかれやう
にのみなりゆきけりさりけれともつらけなるけ
しきもみえてかうちへいくことにおとこの心の
ことくにしつゝいたしやりけれはあやしと思ひ
てもしなきまにこと心もやあるとうたかひて
月のおもしろかりける夜かうちへいくまねにてせんさ
いのなかにかくれて見けれは夜ふくるまてことを
かきならしつゝうちなけきてこのうたをよみ
てねにけれはこれをきゝてそれよりまたほかへ
もまからすなりにけりとなむいひつたへたる

たいしらす
たかみそきゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへてなく
わすられん時しのへとそ浜千鳥ゆくゑもしらぬあとをとゝむる
貞観御時万葉集はいつはかりつくれるそと
とはせ給ひけれはよみてたてまつりける
文屋ありすゑ
神な月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることそこれ
寛平御時うたたてまつりけるついてにたてまつ
りける
大江千里
あしたつのひとりおくれてなく声は雲のうへまてきこえつかなん

藤原のかちおむ

人しれす思ふ心ははるかすみたちいてゝ君かめにもみえなむ

哥めしける時にたてまつるとてよみておくにかきつけてたてまつりける　伊勢

山河の音にのみきく百敷を身をはやなから見るよしもかな

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　よみ人しらす

あふことのまれなる色に思ひそめ我身はつねに
あま雲のはるゝ時なく富士のねのもえつゝとはに
思へともあふ事かたしなにしかも人をうらみむ
わたつみのおきをふかめて思ひてし思ひはいまは
いたつらになりぬへらなり行水のたゆる時なく
かくなわに思ひみたれてふる雪のけなはけぬへく

おの色ならて うつろひにけれ かはやまよし あきのよの
あきの花ちる やまのあさの こゝろみれて たもとの色を
そよけりなる おもひいてゝ 冬はそこへ 人のぬへ見ん
すゝきのかり 出入舟のわれて ひとりぬて あはれ人こゝ
露おもみて せむすかたよ 庭よいて こゝやすき色え
しのゝめの 秋のそらに たなく霧の きえはてめく
おもへかし 松かきのね 春日のすゝん よしのまて人を
あはれとも かりそめのと

ゆかりある みそきつり 時のもくろくみなのかりそ
清ク祐兼

ちはやふる 神のみかきを 人の行さへ せてとはそれと
あまひこの おとは山の 夕霧の おしみてれて
行こゑの 見しそのに さ夜ふけて やまのみす
かくなくて 飛も掛さて からひ来 色つさの山の
すみの葉を みえたの 神無月 しくれくて
冬の来ん 庭しろくれな 白の雪ん 松米える
年くれ 時の清て あくまれてふ てんもしけ
忘れの人 春はいふ 世の人なん おもいすゝの
夕しみ霧の 月松の露 あくもして こゝろあかき
今さらかし なれの色を やらくもれ 出ての葉末に

とゝまりの　あはせかはに　思ふくは　中にもいくとせと
伊勢の海の　浦ちかくて　むらはなつめ　よせくる雨
たゝれたの　みつのまへに　おもしろくえと　松のはなの
色をも見て　大宮よりまゐる　人もあはれ　ひとつめうちと
はなふゝき　かすみもをね　ところやかと　したしき春かな
ふる海にも見ゆ　雪の春雨の　ふりやまたれん
雪のうちに　いくはくて　白そよつまのみつうた
壬生忠岑
紀の国も世に出てて　伊勢はいかのねすれ
いかにしてかくす　露をのうへまし　あはれならまし

おり来ても　ふかきそてもはれ　見え来て折る
えて桜の　あまの花を　きえて見ゆる　来の世まての
錦とたえ　ふく散せの　ころ秋かな　ちりにつきしや
ちりの中は　つきたりてを　こけらて世　これを思へ
春しもみて（いかへて）（金のまへきらけしかみて）　雲に消えぬ　をしして　ちりのあはれ
松も冬を　日との色を　国いて来て　かくしおもて
ても日ひろ　ちか来る中の　見わたりを　まいれは秋の
くもかくに　あさむき出て　みつれより　こゑへぞ乱
みつさえの　おきくしくて　松も冬の　さくのかとての
おりにそても　ゆらみの風を　きこゆの来　今も吹山し

ちりかれて　春はかすミに　なかめぬる　夜はふけ人
あきくれし　秋ハ時雨にけり　袖をぬらし　冬ハ霜に我を
せめつゝ　かゝるおもひき　身なりに　つれなき色を
しら雪ハ　いつのむかしに　かへり　こしかたそなき
なくての　むかしをこひて　やよあはれ　身ハ山に住て
遠きこゝろ　串のくるしさ　かくて猶　なかれ梅の
なまし一年　なにしも浦よ　立川浪の　おもの　しつく
おほつかなく　名もなきに命　ゆく花ハ　ことに酒杯
しらぬ山寺　からはしなく　なりぬとも　なとてか瀬の
なとしにきく　色もいひけ　くもりもか　なみのやらよと

かのえたにて夢
君か世にあふさの山のいはし水こゝろにかけてたのむかな
冬の夜ありう歌

凡河内方つ孫

ちはやふる　神な月とや　霜さむく　身にしみぬへき
たつ時雨　紅葉とともに　吹ちる人の　かよひ路の
山おろしも　さむく日ことに　なり初て　むかしなとかけ見
こゝろちかし　霞みまて　しらしこゝろ　やかてまたれ
庭のおもかけ　むらくもみえて　雪の　さえゆかしき
しら中来の　けしきをかくて　わかたまの　色をあまた見

すくしつるかな

七條の后うせ給ひにける後によみける　延喜七年六月八日崩卅六

伊勢

おきつ浪あれのみまさる宮のうちは年へてすみし
伊勢のあまも舟なかしたる心地してよらむかたなく
かなしきに涙の色のくれなゐは我らかなかの
時雨にて秋のもみちと人々はをのかちり/\
わかれなはたのむかけなくなりはてゝとまる物とは
花すゝき君なき庭にむれたちてそらをまねかは
はつかりのなきわたりつゝよそにこそみめ

旋頭哥

題しらす　よみ人しらす

うちわたすをちかた人に物申す我そのそこに
しろくさけるはなにの花そも

返し

春されは野へにまつさく見れとあかぬ花
まひなしにたゝなのるへき花の名なれや

題しらす

はつせ河ふるかはのへに二もとある杉年をへて又も
あひみむ二もとあるすき

つらゆき
きみかさすみかさの山のもみちはの色神な月
しくれのあめのそめるなりけり

誹諧哥

題しらす　　よみ人しらす
梅花みにこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

素性法師
山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣
いくはくの田をつくれはか郭公してのたをさをあさなあさなよふ

七月六日たなはたの心をよみける
藤原兼輔朝臣
いつしかとまたく心をはきにあけてあまのかはらをけふやわたらむ

題しらす　　凡河内躬恒
むつこともまたつきなくにあけぬめりいつらは秋のなかしてふ夜は

僧正へんせう
秋のゝになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひと時

よみ人しらす
あきくれはのへにたはるゝをみなへしいつれの人かつまてみるへき
秋霧のはれてくもれはをみなへし花のすかたそみえかくれする

花とみてをらむとすれはをみなへしうたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

在原むねやな

秋風にほころひぬらしふちはかまつゝりさせてふきり〳〵すなく

あす春たゝむとしける日となりの家のかたより風の雪をふきこしけるをみてそのとなりへよみてつかはしける

清原ふかやぶ

冬なから春の隣のちかけれは中垣よりそ花はちりける

題しらす

よみ人しらす

いそのかみふりにし恋のかみさひてたゝるに我はねそねかねつる

枕よりあとより恋のせめくれはせむかたなみそとこなかにをる

恋しきかかたもかたこそありときけたてれをれともなき心ちかな

ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそ恋しき

みゝなしの山のくちなしえてしかなおもひの色のしたそめにせむ

あしひきの山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしきこと

ふしのねのならぬおもひにもえはもえ神たにけたぬむなしけふりを

紀のめのと

あひみまくほしはかすなくありなから人につきなみまとひこそすれ

きのありとも

人にあはむ月のなきにはおもひおきてむねはしり火に心やけをれ

小野小町

人にあはむ月のなきには思ひをきてむねはしり火に心やけをり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

春霞たなひく野への若菜にもなりみてしかな人もつむやと

新[illegible]

よみ人しらす

おもへともなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山もあらしと思へは

平定文

春の野のしけき草葉の妻恋にとひたつきしのほろゝとそなく

きのよしひと

秋の野につまなき鹿の年をへてなそ我恋のかひよとそなく

みつね

せみの羽のひとへにうすき夏衣なれはよりなむ物にやはあらぬ

たゝみね

かくれぬの下よりおふるねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ

よみ人しらす

ことならはおもはすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる

思ふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな

思へともおもはすとのみいふなれはいなやおもはしおもふかひなし

我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして

我を思ふ人をおもはぬむくいにや我思ふ人の我をおもはぬ

あしや梅　一本

おもしろき世を人をも我心にしみてはなかなかやむくはかりなる　やかし

よみ人しらず　一本

いて我かむ人をとかやむなしき老に陳つきにくれもなし

我よ深き心も忍ふれとも人をあくよはかはりてふなり　ね

いかにおもふ我身は春の鶯のやみにいりてもふるふ秘すつ

鶯の声は風よりの初音とも我よいくへ人のつまならん

かはらぬ命は人も我かいはぬのとやく露霜をさそふ梢　かな

平中興

何事のとくにつかたし我が道の露そらて八月なかりなり

花の都はいまそかりける

こころさしのよしみに山のあはれとも立ちかへり人の思ひ我なきかな　ね

なつかし

思ふ梅かさ梅の山のかさまや人の心をみてはなやかなる

伊勢

なかにさくら色の梢にしかるなりしは我身とおもはで悲しき

よみ人しらず

思ひ人の道にとなにはかはりくものや思ひ乱れておもはれなくも

忠岑

我かつらみ右の筆はならでかたなく迷ふは我ひとりかな

いとこそありけれたとへここにいま我きて今日のなこりをしかは

[illegible]　源[illegible]の女

よそなから我身にいとゝそれなりと人のいはむにしもつらくは[illegible]

[illegible]

さぬき　安倍清行朝臣女

秋来て後さへみえてあはれ秋はてゝは今日のけふなれはそれ[illegible]

大輔　源たすくの女

[illegible]の山のふもとにたつ霧のはれぬ思のはてまつくれを

よみ人しらす

なき来をといひなれつゝもあまたの山のかけにて[illegible]

今日の事をもいとよりいかてみこそ来てをしかれ

よひのまはいてゝ入ぬるみか月のわれて物おもふころにもあるかな

そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

世中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ

在原元方

よの中はいかにくるしと思ふらんここらの人にうらみらるれは

よみ人しらす

なにをして身のいたつらにおいぬらん年のおもはむことそやさしき

おきかせ

身はすてつ心をたにもはふらさしつゐにはいかゝなるとしるへく

千里

しら雪のともに我身はふりぬれと心はきえぬ物にそありける

よみ人しらす

梅花さきてのゝちの身なれはやすき物とのみ人のいふらん

法皇西河におはしましたりける日さるやまのかひにさけふといふことを題にてよませたまうける

みつね

わひしらにましらななきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらす　　よみ人しらす

世をいとひこのもとことにたちよりてうつふしそめのあさのきぬなり

古今和歌集巻第二十

大歌所御歌

おほなほひのうた

あたらしき年の始にかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろつよまてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

あふみふり

あふみよりあさたちくれはうねのゝにたつそなくなる明ぬこのよは

みつくきふり

水くきの器のやうにいりてうつして後乃あさをみしりて　乃ちりて
したゝる山の
まさに山といひてうれしかさねたいの浮き来あかりたなしと　舟
我おもひのうし
いりをみくら
我きみむろの山のさかさは我みまへよりのあしよ　行
露やらひをけつ雲をのゝ梛葉のあらさ行き我あこねかし
重まをみあしみ山の山とくもみかくにや海かけらせよ
みやのよは霧山の川やあはるまの川泉のつらきつ来小　行
見ちれくのあさらみれまをこれいらは来河へりこゝのひく　舟

まろ川の井のしみつ定めなくしくまゝにみ常きはよろ
いさ我ためうき
清くの海もれく海河よ弱きあてさし水の新をうしみ舟
かゑしをみくうる
行城や来をかしこよ里て常にありてあかさは梅のもの
梅の緑やくさいろ中山常にさかりて吉河のまたさやけさ
これらは和歌のみちへのきさいのくもれ行
あゆくやくあれさて山河くもまろ君はさてしまろ代まで　よ
これらは水の尾乃みちへのみまさりみくにの為
みちくはの黄乃花の河縁もとてしまゝよつくらむ万代まで也

これハ元慶乃御へのみのゝうた

君か世ハかきりもあらしなかはまのまさこのかすハよみつくすとも

これハ仁和乃御へ乃いせの国乃哥

おほとものくろぬし

あふミのやかゝミ乃山をたてたれハかねてそみゆる君かちとせハ

これハ今上乃御へのあふミのうた

東哥

みちのくうた

あふくまにきり立くもりあけぬとも君をハやらしまてハすへなし

みちのくハいつくハあれとしほかまの浦こく舟のつなてかなしも

我せこを都にやりてしほかまのまかきの島のまつそこひしき

をくろさきみつのこしまの人ならハ都のつとにいさといはましを

みさふらひみかさと申せ宮木のゝこのしたつゆハ雨にまされり

もかミ河のほれハくたるいな舟のいなにハあらすこの月はかり

君をおきてあたし心をわかもたハ末の松山なみもこえなん

さかミうた

こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれ浪

ひたちうた

つくはねのこのもかのもにかけハあれと君かみかけにますかけハなし

つくはねの峰のもみちは落つもりしるもしらぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

甲斐かねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん

伊勢うた

おふの浦にかた枝さしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはん

冬の賀茂のまつりのうた

藤原敏行朝臣

ちはやふるかものやしろのひめこ松よろつ世ふとも

いろはかはらし

家々称證本之本乍書入以墨滅哥今別書之

巻第十　物名部

ひくらし　貫之

そま人は宮木ひくらしあしひきの山の山ひこよひとよむせ

在郭公下空蝉上

勝臣

かけりても何をかたまのきても見んからはほのほと成にし物を

をかたまの木　友則下

くれのおも

はるかみ

あふ時とこひつゝをれは久菅のたかねをいのこみなたちかくる

若草　利貞下

なと来の井　みやこし由

なとみくこまち

なときみれて見るやくれまかし来ハ言やさしまへの別かな

からおもひと　清翁下

うめこそみあはし

あやめかな

う来めさいよ飛せてみそこの見根く雲見音そら山の葉　同

この宿水て尾のみとみちめとのらあはれく

うれりたまう美の咲りしよ哉

桂家下

巻第十一

あし山のともみ孫之の来るの雲下

萬海人とらさの思ハ大井河あさくて水よあとくさを見けるかな

ほ来ぞここにあふさの山の志みとて来ほよふ花とも逢となる

巻第十三

逢しくらさてにしをあるへ並の下

いおくも見こころ山寺あかの河ハ河て志まへよとらあそもちるかな

この宿あの人あらみそくの河さみな孫あふたまへ治と

う孫あるのゑてまつ道治

返し

やまとうたとしきしまの道にいりて人のこゝろくさのたねをもとめ
おほうみ十四
ありふて(?)あさての葉みちや秋をへて下
うごきなきむかしのひかりのてらすとをきひとてさうりて
よろこびこゝろへよいかのちからのふるきまなびしてしるし
深養父より よむまつきむ事ありなむ下
津守 種基
道をつたへて(?)みちも種なむすゝめ人のきこしめすふて給悉
よみ人しらず

古今和歌集序　紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也
人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生
於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其
吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人
倫和夫婦莫宜於和歌和歌有六義一曰風二
曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之
囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌
謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人
淳情欲無分和歌未作逮于素戔烏尊到

出雲国始有三十一字之詠今反哥之作也
其始雖天神之孫海童之女莫不以和哥通
情者爰及人代此風大興長歌短哥旋頭混
本之類雑躰非一源流漸繁譬猶拂雲之
樹生寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如難波
津之什献
天皇富緒川之篇報太子或事関神異或興入
幽玄但見上古哥多存古質之語未為耳目
之翫徒為教誡之端古
天子毎良辰美景詔侍臣預宴筵者献和歌

君臣之情由斯可見賢愚之性於是相分所以
随民之欲擇士之才也自大津皇子（天武天皇第三皇子）之初作詩賦
詞人才子慕風継塵移彼漢家之字化我日
域之俗民業一改和歌漸衰然猶有先師柿
本大夫者高振神妙之思独歩古今之間有山
邊赤人者並和哥仙也其餘業和哥者綿々
不絶及彼時変澆漓人貴奢淫浮詞雲興
艶流泉涌其実皆落其花孤栄至有好色之
家以此為花鳥之使乞食之客以此為活計之謀
故半為婦人之右難進大夫之前近代存古風者

然二三人猶長短不同論以可辨花山僧正尤得
歌體然其詞花而少實如圖畫好女徒動人
情在原中將之歌其情有餘其詞不足如萎花
雖少彩色而有薫香文琳巧詠物然其體近俗
如賈人之着鮮衣宇治山僧喜撰其詞花麗
而首尾停滯如望秋月遇曉雲小野小町之歌
古衣通姫之流也然艶而無氣力如病婦之着
花粉大友黒主之歌古猿丸大夫之次也頗有逸興
而體甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者
不可勝數其大底皆以艶為基不知歌之趣者也

俗人爭事榮利不用詠和歌悲哉悲哉雖貴兼
將相富餘金錢而骨未腐於土中名先滅於世上
適為後世被知者唯和歌之人而已何者語近人
耳義慣神明也昔
平城天子詔侍臣令撰萬葉集自尓以來時歷
十代數過百年其後和歌棄不被採用雖風
流如野宰相雅情如在納言而皆以他才聞不以
斯道顯
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外惠茂
筑波山之陰淵變為瀨之聲寂寂閉口砂長為

巌之頌洋々満耳思継既絶之風欲興久廃之道
爰詔大内記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少
目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等各献
家集并古来旧歌曰続万葉集於是重有詔
部類所奉之歌勒為二十巻名曰古今和歌集臣
等詞少春花之艶名竊秋夜之長況哉進恐時
俗之嘲退慙才芸之拙適遇和歌之中興以楽吾
道之再昌嗟乎人丸既没和歌不在斯哉于時
延喜五年歳次乙丑四月十五日臣貫之等謹序

此集家々所称雖説々多且任師説又加了
見為備後学之証本不顧老眼之不堪手
自書之近代僻案之好士以書生之失錯
称有識之秘事可謂道之魔性不可用之
但如此用捨只可随其身之所好不可存
自他之差別志同者可随之

貞応二年七月廿二日 癸亥 戸部尚書藤判
同廿八日令読合訖書入落字了
伝于嫡孫可為将来証本

旅伊丹兵庫助藤原朝臣　父親之
宿望終ニ集之書功訖也雖恥悪筆写之
以證本剰相語當時之先達共ニ令連日之比
校併斯道之媚寶後代之亀鑑者乎

于時明應七年　季夏中旬記之

八座一第人判之